

令和5年3月2日

令和4年度 岡山県立岡山一宮高等学校 学校評価書

校 長 梅田 和男

1 自己評価

(1) 評価結果

別紙「令和4年度 学校経営目標における具体的な取組」
『最終の取組と最終評価』欄 参照

(2) 分析・改善方策

別紙「令和4年度 学校経営目標における具体的な取組（重点目標Ⅴ）」
『結果分析・改善策』欄 参照

(3) 学校自己評価アンケートの集計結果及び対策

別紙「学校自己評価アンケート集計結果」及び
「学校評価アンケート総括」 参照

2 学校関係者評価委員名

太田 康介（国立病院機構岡山医療センター腎臓内科医長 本校同窓会会長）
草加 充康（岡山市適応指導教室あおぞら操山 元公立中学校長）
黒田 健介（菅公学生服株式会社取締役 元本校PTA会長）
宮本 浩治（岡山大学大学院教育学研究科准教授）
安井 哲也（合同会社NICO代表社員 元本校PTA会長）
横山 嘉光（岡山市立一宮公民館長）

3 学校関係者評価

別紙「令和4年度 学校経営目標における具体的な取組（重点目標Ⅴ）」
『関係者評価』欄 参照

4 来年度の重点取組（学校評価を踏まえた今後の方向性）

- (1) 特色ある学校経営
- (2) 学力向上と進路実現
- (3) 豊かな人間力の育成
- (4) 開かれた学校づくり
- (5) 校内組織の活性化と人材育成

令和4年度 岡山一宮高等学校 学校経営における具体的な取組

(1) S S H事業の推進とその普及

(2023. 3. 2)

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	関係者評価	結果分析・改善策
I ICコア カリキュ ラム等の開発 と実践	学校設定科目それぞれの目標を達成する教育を実施する。ここでは主としてIC課題探究α、IC理数探究I、IC進路探究について記述する。 IC課題探究α ・広く自然現象や社会現象をとらえるなかで課題を発見し、科学的・学術的な手法で探究し、その結果を考察することで課題に対する理解を深める。この一連の活動を通して探究的な態度と創造的な能力を養う。地域社会の課題解決につながる文理別アプローチの成果を文を縫えて統合する探究活動を行う。ポスター作成・発表の技能を身に付ける。広くSDGsに関わる課題を設定し、グループで探究する。 IC理数探究I 科学及び数学に関する課題を設定し、その課題の解決を図る学習を通して、専門的な知識と技能の深化、総合化を図るとともに、様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度及び倫理的な態度を養う。 IC進路探究 一宮高校での学びと進路の接続がなされるよう、計画・活動・計画の振り返りを行い、理想とする進路実現、その先の社会での将来像を明確にさせる。	IC課題探究α ・ChromeBookを活用した研究をすることができた。調べ学習に使用するだけでなく、協働でファイルを編集することや、オンライン会議機能を用いた担当教員による一斉指示等年度当初教員が予想していた以上の活用事例が出てきた。デジタルベースの研究の優れた事例となった。 IC理数探究I ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」を活用することを始めたが、個人もチームも適切に活用できていないところもあった。深く考えず自己を高く評価する生徒もいた。目標→実践→振り返り→改善→目標のサイクルができていないチームがあったので、指導者が丁寧に指導することが課題である。 IC進路探究 「過去の自分史」作成を通して、そのことをどう将来の自分に反映させていくかを考え、具体的に志望大学を調査し、自己推薦書(志望大学の志望理由書)を作成することができた。二学期の活動は自分の身につけた知識・技能や強みを生かした進路実現に向け、四年後・十年後の姿を考えさせることに繋がった。	IC課題探究α ・社会の諸課題の考察から疑問・仮説を設定し研究計画書を作成する。ファイルの共同編集やGoogleClassroom等を活用し、デジタルベースで研究と振り返りを行う。 ・外部との連携が行えるように、指導者からの情報の提供や外部交渉などの支援を行う。 IC理数探究I ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」を活用し、個人やチームの振り返りを行うとともに指導者は自主性を尊重しつつ適切な助言を行う。 ・年間計画を示し、計画的に研究を行う態度を養成する。 ・外部との連携が積極的に行えるよう指導者が中心になって支援を行う。 IC進路探究 ・「未来の自分史」(志望理由書)作成を通してこれまでの高校生活を振り返り、課題研究の内容を進路選択に結びつける力を育成する。 ・「自己探究プログラム」を通じて、社会生活につながる進路実現のための計画を立て、主体的に活動し、活動を振り返り自身の取り組みを再構築する。	IC課題探究α ・研究活動を通して、自然現象や社会現象を発見し、課題解決につながるアプローチの方法が身に付いている。また、研究活動を通して、探究的な態度と創造的な能力が身に付いている。 IC理数探究I ・研究活動を通して、様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度及び倫理的な態度が身に付いている。 IC進路探究 ・過去、現在、未来の自分を繋げることができ、自分自身の成長を知り、次の進路先や将来像が明確に描けるようになる。・自主的、主体的に学ぶことができる。・自分に必要な学びを自分で計画を立て、実施することができるようになる。 評価Aの基準 コンピテンシーのIV自律的に行動する力とV根拠を越える力の4月～12月の変容について A:全ての項目で伸びている B:平均値が伸びている C:平均値でどちらかが下がっている	IC課題探究α ・授業の初めにMeetを利用して全体連絡を行い、情報の共有を行うことで活動の活性化を図った。 ・Classroomを活用し、期間を分けてアンケートの実施を行うことで、多くのデータを集められるようにした。 ・外部講師から探究のアドバイスをもらう機会を設け、より良い探究の一助とした。 ・研究計画書をHPに掲載することで、卒業生や外部の方の指導・助言を得るための機会としたが、現在は掲載していない。 IC理数探究I ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」を継続的に取り組んでいる。指導者は、個人やグループあてにコメントを記入し、生徒は、その内容を踏まえて次の計画を立てるサイクルを確立しつつある。授業の最後に取り組んだ内容のプレゼンを行っている分野があり、プレゼン力が向上しつつある。 IC進路探究 「未来の自分史」(志望理由書・実現計画書)作成を通して、志望大学について、高校での学びとの接続や、大学卒業後の自身の職業観にまで踏み込んだ志望理由や志望実現のための計画書を作成した。それ以外にも、講演会やAi-Growの実施を通じて、現在と将来の自分について客観的に捉える取り組みを行った。		IC課題探究α ・課題探究のClassroomを用いることで情報の共有化をすることができた。 ・各班のClassroomを作成し、実験協力者への連絡やアンケートを効率的に行うことができた。 ・Googleサイトを活用することで、ポスターを手軽に見られる環境を整えた。 ・研究計画書をHP上にアップし、卒業生や大学関係者から助言をいただく予定であったが、諸般の事情により実施できなかった。 IC理数探究I ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」を継続的に取り組んだ。 ・年間計画や今後の取り組みを定期的に示して、計画的な研究ができるよう支援した。 ・研究計画書を作成し、HP上にアップして卒業生などの大学関係者から助言をいただく予定であったが、様々な事情で実施できなかった。 IC進路探究 ・未来の自分史で計画した取組に基づいた主体的な取組により、自己の特性に応じた実験を選択することができた。進路実績での検証として、国公立大学総合型選抜・学校推薦型選抜の出願数に対する合格者の割合が約6割となっている。(12月現在)この結果は課題探究やこのIC進路探究で育成された生徒の資質、能力の成果と言える。同じ志望系統の生徒でまとまり、集団討論、口頭試問などを行う、志望大学の小論文問題を解くなど、毎時間の学習活動を自分で計画を立て、振り返りシートにまとめて、主体的に学習を進めた。 コンピテンシーのIV自律的に行動する力とV根拠を越える力の4月～12月の変容についてすべての学年の全ての項目が伸びていた。	B	A	IC課題探究α ・Chromebookを用いることで資料の共同作成ができ、作業の効率化が図れたことで、実験や検証、分析に充てる時間が増えた。そのことにより、研究を深めることができた。 ・研究活動を通して、課題解決につながるアプローチの方法(実験、検証)が身についている。また、研究活動を通して、自主的に行動し、探究的な態度と創造的な能力が身に付いた。 ・課題としては以下の点が挙げられる。 ① 研究の記録の活用。前連の研究内容の振り返りや進捗状況の記録方法の改善を図る必要あり。 ② 研究に関する専門家(外部講師)や卒業生との連携。 IC理数探究I ・「研究記録 自己評価表」「理数探究の記録」や日頃の指導において、生徒の自主性を尊重しつつ適切な助言を行った結果、充実した探究活動を行うことができた班が多かった。 ・今後の予定を定期的に示して取り組ませた結果、下校時刻を守りつつ学習と両立しながら研究を進める班がほとんどであった。 ・研究活動を通して、様々な事象や課題に主体的に向き合い、粘り強く考え行動し、課題の解決や新たな価値の創造に向けて積極的に挑戦しようとする態度や探究の過程を振り返って評価・改善しようとする態度が身に付いた。 ・卒業生を中心とした大学関係者との連携が今後の課題である。 IC進路探究 ・今年度新たに行った自己肯定感や多様な他者の価値観を理解しあうための「Anosプログラム」では、社会人の失敗体験や成功体験からネガティブ体験はポジティブな成果を得る過程での必要体験となり得ることを学んだ。また、学びの伝達として、二年生のIC課題探究α、IC理数探究Iへ参加し、アドバイス等を行った。この授業で一宮高校での学びと進路の接続ができた。 ICのIV自律的に行動する力とV根拠を越える力以外のほとんど全ての項目でのびが見られた。目的や期待されるICを示し、それに関する振り返りを行ったこと、進路設計に関する時期や状況に応じてプログラムを変更しながら柔軟に対応したことなどが効果を上げた要因と考えられ、次年度も取組を引き継いでいきたい。しかし、課題研究を行わない3年生においては、ICの1 情報分析活用能力については減少する項目もあった。課題研究以外の場面でも1 情報分析活用能力を意識させることが必要である。課題は学びの蓄積が分散していることで、一元化する工夫が必要である。また、3年間の追跡調査では1年4月から3年になるにつれてICの認知能力と非認知能力ともに伸びていることがわかった。次年度は今回用いたクラス分析以外の手法も用いて分析を行っていきたい。
II サイエ ンスプロ ジェクト	先端研究に挑戦し、研究者・技術者を目指す意欲を育成。科学部等の課外活動を充実するための取組や科学技術・理数系コンテストなどへの参加を促進するための取組を開発し実施する。	1 先端研究所研修 関西の大学訪問は中止→岡山理科大学での1日研修を実施 東京での研修を中止→地震予測研修(オンライン)を実施 2 サイエンスミーティング 昨年度は、新たに岡山理科大学での先端研究所研修で課題研究の相談会を設けた。大学の先生と課題研究について相談する機会を設けた。 3 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 学会等の多くがオンラインで開催され、2年・3年ともに多数の生徒が参加した。本校に案内が来ているコンテスト、学会等の案内を集約し、一貫にした。科学オリンピックの参加者は101名であった。	以下の取組を実施する。 1 先端研究所研修 2 サイエンスミーティング(研究者と生徒の交流) 3 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム	1 先端研究所研修 関西、東京での研修を行い、評価を基に見直すことができる。 2 サイエンスミーティング 卒業生との相談会を実施できる。 3 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 理数科係や普通科課題研究係と連携し、生徒の積極的な参加を促す。 評価Aの基準 先端研究所研修を2回以上実施できる 昨年度よりも学会発表等の参加者を増やすことができる	1 先端研究所研修 関西での大学訪問→岡山理科大学での1日研修を実施。(2年普通科・理数科の希望者23名が参加) 2 学期で関西での大学訪問が可能を検討中。 東京・筑波研修→2泊3日の東京大学での研修を予定 2 サイエンスミーティング 岡山理科大学での研修で、各分野に分かれ課題研究の相談会を実施。 3 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 物理系三学会に3年生5グループ、生物系三学会に3年生4グループ参加。金属系三学会に3年生2グループ参加し、1チームが優秀賞。マスフェスタに3年生1グループ参加。サイエンスキャスルに2年生14チーム参加。中国四国支部 若手フォーラム6チーム、日本物理学会Jr.セッションに12チーム参加予定。 物理チャレンジに28名参加。化学オリンピックに7名参加。生物オリンピックに18名参加。	B	1 先端研究所研修 1学期:岡山理科大学研修を実施(2年普通科・理数科の希望者23名が参加) 2学期:神戸研修を実施(1・2年普通科・理数科の希望者30名が参加) 3学期:東京大学研修(2泊3日)を実施予定 2 サイエンスミーティング 岡山理科大学での研修で、各分野に分かれ課題研究の相談会を実施。 3 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 物理系三学会に3年生5グループ、生物系三学会に3年生4グループ参加。金属系三学会に3年生2グループ参加し、1チームが優秀賞。マスフェスタに3年生1グループ参加。サイエンスキャスルに2年生14チーム参加。中国四国支部 若手フォーラム6チーム、日本物理学会Jr.セッションに12チーム参加予定。 物理チャレンジに28名参加。化学オリンピックに7名参加。生物オリンピックに18名参加。	B	B	1 先端研究所研修 例年よりも1回多い、計3回の研修を実施(予定も含む)でき、生徒の科学への興味関心を高める活動の機会を増やすことができた。初めて実施した神戸研修での生徒の感想は、全員が肯定的な意見であり、今後も続けていきたい。 2 サイエンスミーティング 昨年度と同様に実施ができた。次年度は新たな機会の場を設けていきたい。 3 学会発表・コンテスト・科学オリンピック強化プログラム 普通科・理数科の課題研究係と連携することで参加チームの数を増やすことができた。オンラインでの開催も多くあるため、次年度は参加するコンテストの幅を広げていきたい。
III グロー バルプロ ジェクト	国際性を身に付け、国を越えて課題解決を目指す意欲を育成する。	1 エレメンタリーグローバルプログラム(ICEGP) 昨年度はiCイングリッシュ、iCアカデミックイングリッシュの発表会の位置づけで1年生全生徒に実施。今年度は発表だけでなく、質疑応答などの即興的なやり取りの練習を行う。 2 海外との交流 昨年度海外研修は中止となりオンラインによる交流を行った。今年度も慶南科学高校とのオンライン交流(2月)に向けて1学期から英語プレゼンテーションの準備を行う。 3 理数探究I 英語発表会 昨年度は留学生を10名招聘しポスター発表会を実施。今までも比べ英語に関する指導を増やした。今年も発表する態度の育成に向け指導を行いたい。	以下の取組を実施する 1 エレメンタリーグローバルプログラム(ICEGP) 2 海外との交流 3 理数探究I 英語発表会	1 エレメンタリーグローバルプログラム(ICEGP) ・1年生全体に対して実施する。 2 海外との交流 ・慶南科学高校とのオンライン交流を実施する。 ・慶南科学高校以外との交流イベント等に3回参加する。 3 理数探究I 英語発表会 ・発表前に外部指導者及び校内の指導者が指導を行う。 評価Aの基準 1:質疑応答の練習が授業で2回以上できている。 2:慶南以外の交流が5回以上できている。 3:外部、校内の指導が4回以上できている。	1 エレメンタリーグローバルプログラム(ICEGP) 1年生普通科は12月、理数科は1月に実施予定である。質疑応答の練習を含めた授業計画を作成中。 2 海外との交流 ・慶南科学高校とのオンライン交流を1～2月に実施する。昨年度の反省も踏まえ、なるべく早く英語の原稿作成に取り組み。 ・慶南科学高校以外との交流イベントについては、1回実施。あと3回計画中である。 3 理数探究I 英語発表会 外部指導者の調整を行っている。またよりよい発表会になるよう、実施形態の変更も考えている。	B	1 エレメンタリーグローバルプログラム(ICEGP) 1年生普通科は12月15日に予定通り実施することができた。参加した生徒からも、また留学生からも非常に肯定的な意見が得られた。また昨年度は行えなかった質疑の練習を授業で1回、また授業外で質問を考えてくるような指導を1回行った。その結果質疑応答が昨年度よりも活発に行われていた。理数科は1月24日に実施予定である。昨年度より形を変え、やりとりを重視した内容にしていこう。 2 海外との交流 ・慶南科学高校とのオンライン交流を2月14日に実施する。昨年度の反省を活かし、準備が早めに進んでいる。 ・慶南科学高校以外との交流については、ベトナムのハノイ教育大学附属高等学校と関係、また海外から来た学生の受け入れを1回行うことができた。どちらも、生徒は意欲的に交流に参加した。さらに海外との交流ではないが、WWJコンソーシアム事業の一環で、大学の先生から英語学習や英語によるプレゼンテーションの方法に関する講演を2回受けた。 3 理数探究I 英語発表会 現在校内の指導者による指導を1回、外部指導者による指導を行った。今後校内、外部指導者ともに1回ずつの計4回を予定している。	B	B	1 エレメンタリーグローバルプログラム 1度限りの交流となってしまっているため、複数回実施することができないが来年度に向けて検討する。また、英語で思ったことを伝えられていない時、日本語の使用も有効に行っていくことも検討する。 2 海外との交流 ここ数年オンラインでの交流がメインとなっているが、対面でのやりとりのやりやすさ、また臨場感はない。来年度は徐々に対面での交流を行う事を検討していく。 3 外部指導者について 今年度も岡山大学から多くの留学生が交流に参加した。生徒への指導や質問が的確であり、大変有意義な交流となっている。来年度以降も引き続き協力を得られるような体制作りを継続していく。
SSH戦略 室	・地域との連携を深め、地域で研究者・技術者を育成する枠組みを作る。 ・地域課題から設定した研究テーマを普通科課題探究で実施し深化を図る。	新型コロナウイルス感染症の影響により、多くの行事が中止や規模の縮小になる中、以下の取組を行った。 1 小学校・中学校との連携 昨年度は県主催行事への参加や、本校で「親子わくわく教室」と「プログラミング教室」を実施した。今年度も新型コロナウイルス感染症対策を講じながら、科学実験教室等の実施に向けて準備を進める。 2 専門科高等学校との連携 昨年度は興南高校と連携し協同研究を行った。今年度は連携高校を増やす。 3 岡山市との連携 昨年度はユネスコ部・ユネスコ委員会を中心に「大漁旗プロジェクト」や「岡山SDGsプラザ」等に参加した。今年度も岡山市主催の行事に積極的に参加し、市内の地域や企業との連携を進める。 昨年度は「iCサイエンスフィールドワーク」の一環として6カ所の企業を訪問した。また、普通科課題探究に大学の研究者を招聘し指導を受けた。今年度は一宮公民館との連携を継続発展させるとともに、企業訪問や大学との連携を進めていく。 * 岡山大学聴講 昨年度は中止。今年度も実施予定がないため、コンソーシアムプロジェクトとしての取組を行わない。	以下の取組を実施する 1 小学校・中学校との連携 2 専門科高等学校との連携 3 岡山市との連携 4 大学・地域・企業との連携	以下の取組をこれまでの成果と課題を基に改善されて実施できている。 1 小学校・中学校との連携 ・科学実験教室等の実施 2 専門科高校との連携 ・専門科高校と共同研究の実施 3 岡山市との連携 ・連携先の開拓 4 大学・地域・企業との連携 ・企業訪問研修の訪問先の開拓 ・大学との連携を深め、研究者の招聘をすすめる ・地域(一宮公民館)との連携強化 評価Aの基準 ・科学実験教室等が開催できる。(1・3) ・地域の課題解決に向けた研究や研修講座が実施できる。(2・4)	1 小学校・中学校との連携 ・8月科学実験教室を実施、学童対象のフードロス教室実施 ・中山中学校 ふれあいサタデーに参加 ・中山中学校 ふれあいサタデーに参加 ・親子わくわく教室実施 2 専門科高校との連携 ・高松農業高校とドギーバッグの協同素材研究実施 3 岡山市との連携 ・岡山県高等学校ユネスコスクールネットワークと連携し、ブルガリア高校生と共同でSDGsカレンダーを作成した(7月完成) 4 大学・地域・企業との連携 ・ユネスコ部 岡山トヨタ、KSBとフードロス協同啓発活動実施 ・地域(一宮公民館)との連携強化 一宮公民館:高齢者対象パソコン教室実施(8月) 小学生対象絵本読み聞かせ実施(8月)	B	1 小学校・中学校との連携 ・8月科学実験教室を実施、学童対象のフードロス教室実施 ・中山中学校 ふれあいサタデーに参加 ・科学キッズフェスティバルin京山祭に参加 ・親子わくわく教室実施 2 専門科高校との連携 ・高松農業高校とドギーバッグの協同素材研究実施 3 岡山市との連携 ・岡山県高等学校ユネスコスクールネットワークと連携し、ブルガリア高校生と共同でSDGsカレンダーを作成した(7月完成) ・岡山県高等学校ユネスコスクールネットワーク事前学習会(10月)と実践交流会(12月)に参加した 4 大学との連携 ・課題研究の指導 述べ28名の教授、院生、学生を招聘し指導を受けた。 ・iCサイエンスフィールドワークへの講師招聘 述べ6名の講師を招聘した。 ・ICEGPとIC理数探究英語発表会に各16名の留学生を招聘した。 5地域・企業との連携 ・ユネスコ部:岡山トヨタ、KSBとフードロス協同啓発活動実施 ・(株)カルビー、フードバンク岡山、(株)ウィライツ、岡山高校、清心高校と共同で学童保育児童約1000人を対象にオンラインでフードロス削減イベントを企画実施した。 ・地域(一宮公民館)との連携強化 一宮公民館:高齢者対象パソコン教室、小学生対象絵本読み聞かせ、科学実験教室、プログラミング教室等 京山公民館:マイボトルデザイン作成 ・iCサイエンスフィールドワークで理数科1年生が6企業・研修施設に分かれて研修を行った。	A	A	コロナ禍の影響がある中、対面とオンラインとを駆使して生徒の活動範囲を広げることができた。 2の専門科高校との連携では、その活動を「第8回全国ユース環境活動発表大会」でプレゼンしたところ中国大会へ出場することができ、そこで、上位5チームに入賞することができた。 5の地域との連携強化においては、特に一宮公民館の行事に120名を超える生徒が関わることであった。地域との関わりについては2年生の課題探究の発表や深化の場でもあるので、公民館との連絡を密にとっていきたい。

V	IALプロジェクト授業改善に関する取組	①探究型授業の実践に向けて、校内全体で組織的かつ計画的に取り組む体制作りを行うとともに、全教職員のスキルを向上させ、他校にも公開する。 ②探究型授業を実践することで、全てのコンピテンシーの育成を図る。	1 「一言学習スタンダード」に基づいた「リフレクションシート」を作成し、実施したが、数値の集計や振り返りの指示は教務課が主導で行った。教務課との連携において、スピードに課題があった。 2 めあてに「コンピテンシー」を位置づけた授業実践に基づく各教科・科目で「ルーブリック」を作成したが、それを用いて評価したのは一部の教科・科目であった。 3 授業改善教科分析会議を各教科で行った。実施時間や手法は各教科で計画・実施した。 4 授業改善教員研修会を他教科と交流する形で1回実施した。 5 いちのみや探究デーを実施したが、他校からの参加者が少なかった。	全ての教科・科目の授業において、探究型授業を実践するよう教員に働きかけ、ICの全ての資質・能力の育成を図る。 1 「一言学習スタンダード」に基づいた「リフレクションシート」による振り返りの分析(教務課と連携)。 2 めあてに「コンピテンシー」を位置づけた授業実践に基づく各教科「ルーブリック」の活用。 3 互見授業、「リフレクションシート」実施後に、授業改善教科分析会議の実施。 4 各教科の分析結果を基に、全教職員による授業改善教員研修会の実施 5 「いちのみや探究デー」の実施。蓄積してきた探究活動のノウハウを普及するために県内中等教育学校、高等学校教員に向けた研修等の実施。	1 リフレクションシートを用いた振り返りと分析を教務課と連携して行っている。(A:かつ、次に生かすことができていいる。) 2 作成したルーブリックを用いて、評価を行っている。(A:かつ、実施後の振り返りを行うことで見直しができている。) 3 互見授業に参観し、互いに授業力向上のための意見交換ができていいる。(A:2回以上参観を行った教員の割合が80%に達する。)授業改善教科分析会議が年2回実施できている。 4 全教職員による授業改善教員研修会を年1回実施できている。(A:会議に出席した教員の70%が参考になったと回答する。) 5 いちのみや探究デーを実施し、県内外の他校に向けて公開し、多くの先生方に参考となっている。(A:探究デーに参加した他校の教員の70%が参考になったと回答する。) 評価Aの基準 上記5項目のうちA評価が3つ以上	1 7月に各教科でリフレクションシートの結果をもとに振り返りと分析を行った。11月に実施した結果と合わせてIALとしての分析を行い、校内で共有している。 2 コンピテンシーの育成を意識させるため、普段の授業で教科ルーブリックの一部)を活用する取組を行うよう各教科に働きかけていく。 3 6月に互見授業を実施し、授業者と参観者は参観シートをもとに、意見交換を行った。2回以上参観を行った教員の割合は47%であった。未達成の教員を対象に10月～11月に参観する機会を設ける。事後アンケートではChromebookの活用方法や主体的学習に取り組ませる手法について学ぶ機会となったという回答が多かった。 4 7月にICTを活用した授業づくりについての研修会を行った。事後アンケートで95%が参考になったという回答があった。 5 11月8日・9日の開催に向けて、現在HP上で告知を行っている。各教科で授業担当者を決定し、研修会を設定しながら授業計画を作成している段階である。	B	1 7月・11月に実施したリフレクションシートについて、教務課が結果をまとめた。IALプロジェクトとして、7月から11月の生徒の姿容について各教科のものを学年ごとに分析し、その結果を教科にフィードバックしている。【A】 2 一部の教科の授業において、教科ルーブリックを活用して生徒が自らの学習状況について自己評価を行わせることができた。一方で、観点別評価と教科ルーブリックとのつながりが明確ではないこと、現在のルーブリックが具体的な授業の場面で活用しにくいことから、活用が進んでいない教科が多かった。【B】 3 6月の互見授業を実施した時点では、2回以上参観した教員数が目標を大きく下回っていたため、2学期も引き続き未達成者に呼びかけた結果、12月末時点で2回以上の参観を行った教員が70%に上昇した。提出された参観シートの記述からも意見交換が活発に行われたことがうかがえ、事前事後アンケートから共通して関心が高い内容も把握することができた。【B】 4 互見授業の事前事後アンケートから、教員の興味・関心が高い項目をテーマに選んで研修会を企画した。実施後のアンケート結果から、参加した教員の満足度が95%と高かったことがうかがえた。【A】 5 11月8日・9日に、「いちのみや探究デー」を開催した。午前中は1・2年生の保護者に、午後は県内の教員、県教委、SSH運営指導委員、学校評議員などの方々にHPで告知するなどして参加を呼びかけた。当日の午前中は保護者139名、午後は28名が参加した。各教科で事前・当日・事後に研修会を実施し、探究型授業の技術向上や観点別評価の在り方等について認識を深めることができた。事後アンケート(校内)では、自身の授業づくりの参考になったという回答が95%に達し、また、半数の教員から、探究型授業を構成する技術、イメージの具体化、問いの立て方について学べたとする回答が得られた。参加者に限定して授業動画を配信できた。外部の参加者の100%から参考になったという回答があった。【A】	A	A	1 リフレクションシートは、生徒自身が学習に対する取組やできるようになったことを振り返る手立てとして有効である。各教科(学年ごと)としてまとめられた結果をIALプロジェクトが分析するとともに、科目担当者が生徒の成長や課題について分析し、今後の指導に生かすよう呼びかけていくことが必要である。 2 観点別評価とは別に、現在の教科ルーブリックを授業の場面で使いやすいような形に見直ししていく必要がある。 3 互見授業が授業のスキルアップにつながっていることが教員の回答からもうかがえる。より有効な方法を探り、実施時期、回数などを検討していく必要がある。教員の興味・関心に応じた授業参観の仕組みは継続していく。 4 互見授業の取組と連動する形で、教員の興味・関心を反映したテーマで研修会を行えた。 5 外部の参加者からのアンケートの回答を回収しやすい方法を検討する。QRコードで回答してもらうだけでは回収が困難である。
	VI	検証評価プロジェクト	SSHの取り組みの評価を行う。 1 iCルーブリックを用いた姿容評価をグーグルクロムを用いて行う事ができた。さらなる回収率のアップと活用方法を検討する。 2 全卒業生を対象にアンケートを実施し、約140名からの回答を得られた。対象とする卒業生を限定しより多からの回答を得られるようにする。	1 iCアンケートによる生徒の姿容評価 2 卒業生アンケートによる卒業生評価	1 ICアンケートを4月と12月に実施できる。 2 対象とする期を限定してアンケートを実施し、回収率を昨年度より上げられる。 評価Aの基準 A クロムブックを用いてアンケートを実施し、有効なアンケート回収率90%以上(昨年度87%) B 卒業生アンケート回収率60%以上	1 4月にiCアンケートの実施をフォームを活用して行った。いずれの回答も、学年が進むにつれて肯定的な回答が多くなる傾向がつかめることから、学年進行につれてコンピテンシーが育成されていると言える。 1年生の情報分析活用力が低いのが、昨年度の1年生と比較してあまり大きな変化はない。この能力は1年生ではまだまだ養われていないが、2・3年生は学年が進むにつれて順調に高い数値を示していることから、適切な指導が行われていると思われる。他の項目についても分析を行い、会議などで情報共有を行った。12月に再度実施をし、生徒の姿容をつかみたい。 2 卒業生アンケートに関して継続して実施できる体制を確立できるように計画したい。	B	12月にもiCアンケートをフォームを用いて実施した。スムーズな収集、分析を行うことができた。いずれの項目でも学年が進むに連れて肯定的な回答が多くなっており、本校の取り組みがコンピテンシーの育成に効果があると見える。 1月より卒業生アンケートをホームページ等で呼びかけた。卒業生から課題探究等へのアドバイスを得ることも期待しながらの取組みである。	B	B	iCアンケートの結果から、課題として、情報分析活用力の数値が低いことや、3年での数値が減少している項目が見られた。実際には授業中や探究活動のなかで、ICTの活用が活発に行われており、能力の育成は順調なように思われることから、生徒の自己評価のありかたや、自己肯定感をもたせる取り組みのあり方を考える必要があると思われる。卒業生アンケートについては、今後どのようにしてアンケートの回収率を上げていくのが課題である。また、アンケートの実施時期、期間、間隔についても検討していく必要がある。
	VII	普及・広報プロジェクト	研究開発成果の普及を行う。 1 SSHのWebページのレイアウトを刷新することができたので、内容を充実させていく。 2 SSH通信の内容が充実していなかったので、生徒の姿容等を盛り込むことや生徒に原稿を書いってもらうことでSSH通信の内容を充実させる。 3 原稿作成依頼を早めに行うことで、余裕を持った校正ができるようになる。	1 ホームページおよびSNSによる各取組の情報発信 2 SSH通信の発行 3 研究開発実施報告書および成果物(普及用資料)の作成	1 ホームページやSNSを活用した情報発信ができていいる。 2 昨年度より中身を充実させたSSH通信を発行することができている。 3 年度末に研究開発実施報告書および成果物(普及用資料)を完成させることができている。 評価Aの基準 A: SSH通信を35号以上発行する B: SSH通信を30～34号発行する	1 ホームページやSNSでSSH通信を発信することができた。また、研究計画書をホームページに掲載した。 2 SSH通信に生徒の感想等を盛り込むことによって、昨年度より中身を充実させることができていいる。 3 研究開発実施報告書の今年度の様式がJSTから送られてきたので、年度末の完成に向けて報告書の作成を行う予定である。	B	1 ホームページに「卒業生人材バンク」と「課題研究専用ページ」のページをパスワード付きで開設した。他にも「いちのみや探究デー」のページに動画を載せるなど、SSHに関するページを更新することができた。 2 SSH通信に生徒の感想を掲載することや、内容によっては生徒に記事を作成させることでSSH通信各号の中身を充実させることができ、35号以上発行することができた。 3 研究開発実施報告書および成果物を完成させることができた。	A	A	普及・広報プロジェクトチーム全員でSSH通信を担当し、発行した。また、通信1号に付き1行事の掲載という形で内容を充実させ、行事に参加した生徒の感想を記載するようにした。これにより、昨年度よりも生徒の様子を発信することができ、なおかつ発行数が増え目標の35号以上を発行することができた。教員個人の負担は昨年度よりやや増えたが、教員がSSHの取組について理解するという点で大きな成果となった。しかし、学校評価アンケートの保護者のSSHに関する35の項目では「特色ある教育活動についてよくわからない」との回答が12.5%、「大学との連携や海外との交流についてよくわからない」との回答が18.0%であった。SSH通信となると発行まで時間がかかるので来年度はブログやSNS等でタイムリーに情報を発信することでSSH事業に対する保護者の理解を深めていく。また、「いちのみや探究デー」や課題研究発表会等のSSHの取組がわかる動画はあるが、肖像権、著作権の問題で広く公開できていない。次年度以降改善に向けて検討していきたい。
	VIII	SSH事業総括(SSSH戦略室)	I～ⅦのプロジェクトチームをまとめSSHを推進する。 年間を通して毎週1時間SSH戦略室会議を実施した。会議では各PTから状況説明をしてもらうことで、旧SSH推進体制の令和2年度と比べてSSHの行事の企画・実施やSSH通信やブログの更新がスムーズに行われた。コロナ禍にもかかわらずSSHの取組を実施することができたのはPTを組織した影響が極めて大きい。その一方で普通科課題研究担当者が会議のメンバーに入っておらず連携に支障があった。また学校評価アンケートの「SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践を行っている。」では肯定的意見が教員97.0%、保護者91.8%、生徒88.6%であった。SSHを全校体制で推進していると判断できる。その一方で生徒の肯定的意見のみ若干低い値であった。	1 SSH戦略室会議 ・全体企画、進行、調整 ・SSH運営指導委員会との連絡、調整 ・JSTとの連絡調整 ・運営指導委員会の企画 2 SSH事業評価 ・全体評価 ・各種評価(生徒・保護者・教員対象)の分析。 JSTによるSSH意識調査の結果をSSH評価委員会で分析。SSH運営指導委員会による評価を行い、事業全体の成果と課題を検証し、次年度へ反映する。 ・各取組評価 取組の事前事後にアンケートを実施してもらい、SSH評価委員会に取組評価を随時行ってもらい、次年度へ反映する。	1 SSH戦略室会議 ・週1回のSSH戦略室会議を核として、SSHが学校全体の取組となっている。 2 SSH事業評価 ・各種評価の分析をSSHの取組に反映させることができている。 評価Aの基準 学校評価アンケートの「SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践を行っている。」の項目についての肯定的意見の割合 A:教員、保護者、生徒すべて90%以上 B:教員、保護者90%以上かつ生徒80%以上 C:教員、保護者90%未満または生徒80%未満	1 SSH戦略室会議 調査や行事による時間割変更を除いて、毎週1回実施することができた。7月から8月中旬までは会議を実施していないが、各キャップと密に連絡を取り、各プロジェクトで多くの取組を進めることができた。また、SSH職員会議では、毎月の職員会議後にプロジェクトごとに会議ができるようになり、多くのプロジェクトチームがこの時間を有効に活用している。 2 SSH事業評価 各取組で生徒アンケートを実施し分析も行っていいる。また、今年度より行事に参加した生徒にインタビューを行い、生徒のコメントをSSH通信に掲載している。また昨年度のiCアンケートの分析結果から1年12月の数値が2年4月では下がることがわかった。これはiCルーブリックが機能しているかと判断できる。今後は生徒の追跡調査を行う予定である。	B	1 SSH戦略室会議 21回会議を実施した。(1月20日現在)毎週の会議で各プロジェクトの状況を報告してもらい、戦略室内で共有することができた。 2 SSH事業評価 各取組で生徒アンケートを実施し、分析を行った。現在それらを集約し、SSH研究開発実施報告書にまとめている。年度末に完成し、全国のSSH校に配布する予定である。 学校評価アンケートの「SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践を行っている。」の項目についての肯定的意見の割合は教員98.6%、保護者81.6%、生徒85.4%であった。また、今年度新たに教員への項目に「SSHの各プログラムの実施に向け、担当のプロジェクトチームのメンバーと協力して取り組んでいる」を加えて、肯定的意見の割合は90.7%であった。	B	B	SSHの推進については各プロジェクトのキャップが頑張っている(R3)→プロジェクトチームで頑張っている(R4)となり、これにより各取組の質の向上と継承ができる体制を作ることができた。その一方で学校評価アンケートの保護者の「よくわからない」が12.5%あり、自由記述では「文系生徒にSSHは役に立たない」とご意見をいただいた。本校のせまの取組が伝わっていないことがよくわかった。「SSHと授業との繋がり」に課題があると考える。教科のめあてとコンピテンシーを示し振り返りを行ってもらうためにもIALを核とした授業改善が必要である。
教務課		IALプロジェクトの授業改善に関する取り組みをサポートおよび実践する。	・リフレクションシートによる授業評価は行ったが、分析への資料提供が遅れた。 ・互見授業(複数人による参観)の参加率が下がった。 ・探究デーの実施を支援したが、コロナの影響もあり外部からの参観者は少なかった。また他教科の見学は日程的に難しかった。 ・学校評価アンケートの間「IAL型授業を積極的に取り入れるなど、学校全体で探究型授業の改善・工夫に取り組んでいる」で「よくあてはまる」は教職員の38.8%だった。	・リフレクションシートによる年2回授業評価と集計を1学期末、2学期末までに行い、授業改善にいかせるようにする。 ・IALプロジェクトと連携し、探究デーと公開授業を円滑に実施する。	①IALプロジェクトと連携して、リフレクションシートによる年2回の授業評価を行い、結果集計を滞りなく教職員に提示することができた。 ②IALプロジェクトと連携し、探究デーと公開授業が滞りなく実施することができた。 A基準・・・上記に加え、③が達成できた。 ③学校評価アンケートの間「IAL型授業を積極的に取り入れるなど、学校全体で探究型授業の改善・工夫に取り組んでいる」で「よくあてはまる」が教職員の50%以上。	・第1回リフレクションシートによる授業評価と結果集約を滞りなく行うことができた。 ・第2回リフレクションシートによる授業評価、11月の探究デーの授業公開についても、準備を進めている。	B	①リフレクションシートによる授業評価と結果集約を1、2回とも滞りなく行うことができた。 ②IALプロジェクトと連携し、11月の授業公開及びいちのみや探究デーの円滑な実施ができた。また、授業公開についての保護者アンケートの結果集約も着実に執り行うことができ、保護者からも好評をえた。 ③教職員の50%が「学校全体で探究型授業の改善・工夫に取り組んでいる」によくあてはまると回答。	A	A	・公開授業の機会増加を要望する声もあるので、コロナの状況をみて充実をはかる。
	UNESCO係	外部機関・内部他分掌と連携しながら、校内でのESD(SDGs)の周知をはかる。	・ユネスコ係がどのような活動をおこなっているのか、周囲にわかりにくい環境であった。他分掌と連携することで持続可能な環境作りが必要である。	・外部機関に講演会を依頼。年1回以上の研修会への参加。 ・ユネスコ・SSH委員会の活動の発信。 ・課題探究との連携。	・係の仕事が明確になり、委員会としてユネスコの啓発活動ができる。 ・SDGsについて2年生が自分事ととらえ、「よく知っている」と答えることができる。 A基準：LHRで委員会主催の活動ができる。2年生85%がSDGsについてよく知っていると言えることができる。	・ユネスコ部、委員会と合同で清心女子高校と一緒にウクライナ基金をおこなった。 ・1年生9月、2年生11月のLHRでユネスコ・SSH委員主導で貿易ゲームを実施する。	B	・ユネスコ・SSH委員会主催でLHRを実施することができた。 内容:貿易ゲーム 1年生:9月28日実施 2年生:11月21日実施 ・清心女子高校と合同でウクライナカラーの四葉リボンを作成し、文化祭で配布することができた。 リボン合同作成日:8月29日 文化祭:9月3日 ・2年普通科課題探究のアンケートで「SDGsについて知らないで説明できない」と解答した生徒は1名。それ以外は何らかの説明はできたと解答した。 ・岡山県ユネスコスクールネットワークの行事に参加してSDGsについて学びを深めることができた。	A	A	・生徒が主体となって、活動を決めることができた。LHRでの貿易ゲーム実施については、今年度1、2年生徒も同じ内容を行ったので、次年度学年で内容を渡えるかどうかを検討事項である。 ・普通科課題探究については、SDGsの理解度について「かなり詳しく説明できる」「大まかな説明はできる」が58.7%であり、「説明に自信がない」が40.8%となっている。SDGsの17のゴールを自分たちの探究内容と結び付けているので、自信を持って説明できる生徒を増やしていきたい。 ・外部行事については、コロナ禍の影響がまだあり、全校生徒に参加を呼び掛けることができない1年であった。状況に応じて参加者を増やして行きたい。

(2) 学力向上とキャリア教育の推進										
担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	関係者評価	結果分析・改善策
教務課	・学習評価(観点別評価)の工夫・改善に向けて、教職員間の理解を高める。	・教員研修により、かなりの意識改革はできた。新1年生からの3観点での評価が始まり、「主体的に学習に取り組む態度」の評価についての情報共有が必要と考える。 ・学校評価アンケートの間「指導方法や使用教材及び評価の方法等について、教職員相互に検討する機会が持たれている」で「よくあてはまる」は教職員の29.9%以上。	・新しい3観点による評価と評定のつけ方について一定の基準を設け、1年生とその保護者に提示する。 ・指導と評価の一体化に向けて、外部講師を招いての教員研修を実施する。	①全教職員の合意のもとで、新しい3観点による評価と評定の付け方の基準を設け、1年生と保護者に情報公開する。 ②指導と評価の一体化に向けての教員研修会を実施する。 Aの基準・・・上記に加え、③が達成できた。 ③学校評価アンケートの間「指導方法や使用教材及び評価の方法等について、教職員相互に検討する機会が持たれている」で「よくあてはまる」が教職員の50%以上。	・全教科、全教職員の検討をへて、新しい3観点による評価と評定の付け方の基準を設け、1学期末までに、1年生とその保護者に提示することができた。 ・指導と評価の一体化に向けて、6月末に、外部講師(久世中の山本先生)を招いて教員研修会を実施し、実践例を学ぶ機会を提供できた。	B	①全教科、全教職員の検討をへて、新しい3観点による評価と評定の付け方の基準を設け、1学期末までに、1年生とその保護者に提示することができた。 ②指導と評価の一体化に向けて、6月末に、外部講師(久世中の山本先生)を招いて教員研修会を実施し、実践例を学ぶ機会を提供できた。 ③教職員の50%が「指導方法や使用教材及び評価の方法等について、検討したり研修したりする機会がもたれている」によくあてはまると回答。	A	A	・新しい評価は始まったばかりであり、引き続き、観点別評価の方法について、検討したり研修したりする場を設けたい。
進路指導課	・教科指導力の向上を目指し、第一志望校に合格できる学力を育成する。 ・キャリア教育を充実させ、将来の職業や自己の生き方について主体的に判断できる生徒を育成する。 ・国公立大合格率55%以上 ・岡山大学合格者数45名以上 ・難関大学合格者数6名以上	1.昨年度国公立大現役合格者数は203名(前年度194名)と増加し、国公立大合格率は目標の55%を越えることができた(57.5%昨年度+3%)。岡山大合格者数も47名(昨年度+8)と増加、うち特別選抜での合格者が26名と成果が出ており、目標の数値を上回ることができた。今年度はさらに岡山大一般選抜で挑戦できる層の増加を狙う。 2.総合型選抜、学校推薦型選抜での国公立大合格者数は78名と高い成果が出ており、特に合格率では58.6%と最も高い結果となった。課題探究を通じて育成された生徒の主体性や担任による的確な出願先検討、そして全教員による指導の成果といえる。今後とも生徒の進路志望意識の向上をはかりながら総合型・学推型での合格率向上を目指す。 3.難関大合格者は6名と昨年度より2名増加した。成績上位者層の育成が課題。1、2年生段階からの個別指導の充実をはかり、意欲の高い生徒の育成とさらなる学力の伸長が必要。 4.進路指導の系統性を持たせるための3年間を見据えた指導計画プランとして「進路の手引き」を作成したが、それをどのように活用して系統的な進路指導を行っていくかが課題。	1.難関大学や岡山大学を中心とした国公立大の二次試験に対応できる教科指導力充実の促進(校外模試の実施と分析、進路検討会議での審議、個別大学情報の提供、予備校主催の研修会の案内) 2.高い志を持つ生徒の育成(成績上位層への難関大学を目指すための啓発、ハイレベル模試やオープン模試の実施・分析と個別指導の実施) 3.主体性評価など高大接続改革や新教育課程に対する大学の対応など、入試情報の迅速な集約と伝達 4.的確な総合型選抜・学校推薦型選抜指導を行えるサポートの実施(志望意識の明確化と指導の徹底) 5.Mirano手帳や「キャリア・パスポート」を利用した主体的な活動履歴の蓄積と振り返りの実施 6.各種講演・講座の実施による生徒の将来に資するキャリア教育の充実 7.大学、各種学校卒業後までを見据えた「進路探究の企画立案と「進路の手引き」活用 8.指導体制の充実を目指した、全教員による組織的な小論文指導や面接指導の実施	・共通テスト5科全国平均偏差値46以上(A-50以上)。 ・国公立大合格率を上昇させるために一般入試前期の受験率を向上させる。 ・岡山大一般入試出願者数35名(A-45名以上)、総合型選抜・学校推薦型選抜合格者数15名以上(A-20名以上)。 ・難関大学出願者数8名(A-12名以上)・国公立大総合型選抜・学校推薦型選抜合格率40%以上(A-45%以上)。 ・「進路の手引き」の内容を利用した進路学習が行われている。(A-生徒らが将来に向けての目標と計画を設定し、具体的な行動に移せている)	・実力テストの廃止に伴い、各教科のアセスメントテストの実施の呼びかけ。検討会での活用。 ・校外模試の分析と反省の充実。 ・外部講師を招いての進路講演会の企画(1,2年対象、北予備尚崎さん)。 ・外部講師を招いての保護者向け講演会の企画(ミデナス長江さん)。 ・進路情報の円滑な提供(クロムブックを活用)。来客情報の伝達、共有。 ・オンラインによる進路説明会の実施、後日動画でアップ。 ・教員向け小論文ガイダンスの実施。 ・進路探究での福祉・介護の出席講座の実施。 ・岡大から各学部長を招いての進路ガイダンス。入試情報の提供。 ・1年生学部学科説明会と3年生希望者対象に進路ガイダンスの実施。 ・愛媛大学工学部オンラインガイダンスの実施。 ・駿台教員セミナーの案内。 ・志望理由書の全員添削(学研)と講演会の実施。 ・ミラノ手帳、キャリアパスポートの見直しの検討。 ・3年冬補習の時間の見直しによる自主学習の時間の確保。	B	・共通テスト全国平均(中間集計)を上回った教科(国、英R、英L、日、地、倫・政、現社、物理、物基、生基) ・岡山大学一般入試出願者数42名 ・難関大学出願者数12名 ・国公立大学総合型選抜・学校推薦型選抜合格率 ・なし推薦 総合型 12/25 (48%)、学推37/85 (56.9%) ・内岡山大学35名合格(昨年度名26名合格) ・あり推薦 総合型 13/27 (48%)、学推16/36 (44%) ・進路の手引きについては活用できなかった。 1. ・3年団では校外模試の分析を記述会ごとに行い反省を行った。 ・進路検討会議では、模試分析、アセスメントを基に各教科からのコメントを充実させ、適切な進路指導につなげた。 2. ・学年会や検討会で、成績上位層への成績分析、教科としての個別指導の支援のお願いを行った。 3. ・入試情報については、「情報」については全教員で情報を随時共有。 ・個別の大学の説明については3年団、進路課に案内。 4. ・進路探究を通して、志望理由を明確に、深めていくことができた。 6. ・講演会は生徒、保護者ともに充実させることができた。	B	B	・授業を通した基礎学力の育成。 ・岡山大学にチャレンジできる学力(共通テスト、2次試験)の育成。 ・難関大学志望者の育成。 ・個々の特色を活かした、早期からの入試指導 ・進路の手引きの学年毎の作成。 1. アセスメントの取り組み状況は教科、個人によってまちまちなので、個々の意識を高く持って取り組んでもらえるように改良を促していきたい。 2. 上位者層への指導が長年の課題である。業務過多のため、中々+αでそこへの指導体制が確立されていない。現状ではマンパワーに頼るところが多いのが課題である。 3. 各大学への説明会への参加が少ない状況である。業務過多であるため仕方がない側面もあるが、3年団、進路課で分担して参加し、その内容を学年団で共有し、面談に行かせていきたい。 4. 岡大の年内入試へのチャレンジ人数が増加し、合格者も多くなった(今年度34名出願、昨年度21名出願)。後期日程の廃止の影響も考えられるが、学部長訪問や、進路探究での説明、講演会等の効果もあるだろう。来年度も継続していい結果を出していきたい。 5. キャリアパスポートを「セルフインタビューブック」に改め、Mirano手帳と一体化する。そのことで、必要な時にいつでも記録し、いつでも振り返ることができるようになる。 7. 手引きについては、各学年ごとに企画を中心に作成を任せようと思う。それによって、より実態を反映したものになり、もっとLHR等での活用につながるのではないかと考える。 8. 毎年のことだが、負担が大きいのは否めない。解答例の蓄積、昨年度と同じ大学の担当など、可能な範囲で負担軽減に努めたい。
図書課	・探究的学習、キャリア教育に関する図書の充実 ・図書資料、図書館設備の授業での活用	・貸出率:1年生100%、2年生73%、3年生51%。 1年生については新入生オリエンテーション、2年生については課題探究、3年生については小論文学習での利用が多かった。特に2年生文系の貸出率は93.8%であった。 ・授業での利用は1月中旬までで70時間。1年保健や2年普通科課題探究で多く利用された。 ・WiFi不調などの際には機器の貸し出しもおこなった。	・探究的学習、キャリア教育に関する資料の充実 ・県立図書館との連携(継続) ・オリエンテーションの実施 ・図書館利用促進のための情報発信	・貸出し利用者率:1年100%、2年75%、3年50%。貸出数:5000冊以上 ・キャリアコーナー設置とオリエンテーション実施 ・図書館便りを毎月発行する。クロムブックの利用。 A評価の基準:2年生、3年生に複数の図書資料を読み比べることを勧め、6000冊代にのせる。	・新入生対象、2年生課題研究対象のオリエンテーションを実施。 ・貸出し利用者率は43%で、2年生3年生の利用者率が低い。授業や 進路研究などでの利用をアナウンスしていく。 ・進路課との共催で学部学科コーナーを設置した。 ・図書館便りを毎月発行。クロムブックを利用した図書利用の案内を実施。 ・クロムブック用のプリンターを館内に設置した。 ・県立図書館と連携した、レファレンスと相互貸借を継続。	B	貸し出し冊数は23年1月上旬で3900冊。貸出し利用率1年生＝96% 2年生＝22% 3年生＝27% 全体＝48%。整など勉強が忙しいのかもしれない。 読書感想文コンクール応募し優秀賞など3人の生徒が入賞した。 読書月間にキャンペーンを張り、英コンテストやビブリオバトル、多読賞など図書委員に企画運営をさせて、読書習慣を後押しできた。 授業での活用については、国語・英語・保健・書道・LHR等に78時間の利用があった。 図書館利用アンケートを教職員と1,2年生を対象に無記名で実施して、教員生徒の読書に対する意識調査ができた。結果から、対生徒だけでなく対教師にも利用を促すこと、図書館や書籍に対する意識を変えていくことの必要を感じる。ハードルも高い。	B	B	書籍の有意性を生徒にも教職員にも伝える事が重要で、授業事例なども提供できれば良い。貸出し数云々以前に、図書館に足を運ぶことを、促してもらおう。そのうえで、図書館は、情報取得に有用な場であることや多様な情報取得手段が用意されている場であること、情報活用には目的に沿った取得手段を選択することを認知してもらいたい。 また、目的に合わせた情報の取得方法があることを伝えたい。
情報管理係	・セキュリティの保たれたネットワークを維持する。 ・Chromebookの活用、ICTの活用 の環境を整備する。	・校内の対策基準の作成から県の対策基準も変更されており、順次見直しが相当。またChromebook関連の校内ルールも新たな視点での見直しが必要になると思われる。 ・Chromebookの導入によるICT活用促進と合わせて、教室のWindows機の更新や環境整備が必要である。	・岡山県情報セキュリティ対策基準に則って本校の対策基準を見直し、実施を行う。 ・各教室のPCやPC周辺機器の管理、更新の検討を行う。 ・Chromebookを活用した遠隔授業等に対応できるノウハウの提供を行う。	・Chromebookを含めてPCやサーバーの整備・管理・更新が行われた。 ・Chromebookが授業や校務で十分に活用されている。 評価Aの基準:PCやサーバーの更新が達成された	PC等の整備と管理・更新は順調に行われている。 調査依頼の対応、管理台帳の更新・確認作業は適切に行われている。 ChromebookやPC、サーバーの突発的不具合の対処・各教室のWifi等の不具合は臨機応変に対処できている。 Chromebook活用に関する情報提供を引き続き行いたい。	B	・Chromebookを含めてPC等の整備と管理、更新やUSBメモリの管理等が適切に行われた。 ・県からの調査依頼の対応、管理台帳の更新・確認作業を随時行った。 ・各教室のWifi等環境整備を進めている。 ・PCはすべてWindows10に更新。サーバーの更新は継続検討。	B	B	・GIGAスクールサポータの助けを借りながらネット環境のメンテナンスを行った。 ・GoogleDriveの使い方は多くの先生で習熟しつつあるが、まだまだ検討の必要がある。 ・セキュリティを高めるために、クラウドを活用しつつ、貸出用のUSBメモリの使用を制限していく方法で先生方の業務を考えた。また、行政系のログインサーバーの運用についても県のサーバーへの意向を含めて検討を続けた。
主権者教育担当	・政治的教養を育む内容のLHRの企画・運営 ・選挙や政治への関心を高める働きかけ	R3の学校評価アンケート教員評価指数2.4あてはまる、ややあてはまるの計66.7%となっている。	・政治的教養を育む内容のLHRの企画・運営 ・選挙や政治への関心を高める働きかけ	主権者教育に積極的に取り組んでいる(A-教員評価指数3.0あてはまる、ややあてはまるの計70%以上。)	委員会として、各学年のLHRの企画を進めている。3年LHRは1学期に選挙権を得られる年齢になる生徒がいるので選挙について行なった。また、参議院選挙があったので広報啓発活動も行った。2年LHRは3学期、1年LHRは2学期実施予定。	B	・各学年とも主権者教育LHR(1年:裁判員裁判、2年:税と政治、3年:選挙制度)についての理解)は遅滞なく行うことができた。 ・参議院議員選挙にあたっては、ポスターを掲示した。 ・次年度については、生徒総会等で議論ができるよう、実践できるように準備していきたい。 学校評価アンケート「主権者教育」の項目において ・教員評価指数2.8 ・「あてはまる、ややあてはまる」の肯定的意見70.3%	B	B	・各学年の係に任せられる部分が多いので、コミュニケーションを密にとるとともに、実践の蓄積を共有していく。 ・生徒総会については、早めに関連する分掌や生徒会係とコミュニケーションをとっていきたい。
1年団	「挨拶の徹底」 ・授業前後など様々な場面での挨拶をきちんと行う。 「基本的学習習慣の確立」 ①予習・授業・復習のサイクルの確立 ②Chromebookの適切な活用 「進路実現に向けた適切な文理選択・科目選択」 ①分野別説明会の実施で興味関心のある大学を探す。 ②授業のLHR等の活動で自身の興味関心を知り、進路の方向性を決める。		・授業に集中できる環境作り(黒板周り、自身の机の周りの整理整頓)。 ・Chromebookを活用し、自宅での復習や課題がやりやすい環境を作る。 ・担任面談の年5回実施。成績上位者、成績下位者には教科担当面談や学年主任面談を行う。 ・進路選択の情報収集ができる時間をLHRに組み込む。各教科の評価やスタサポの結果、面談などを通して適切な自己理解を行い、進路の方向性を定めさせる。 ・適性検査等を活用して自分の特性に合った進路選択をさせる	・基本的学習習慣が確立している⇒家庭学習実態調査で評価(A-180分以上60%) ・進路の方向性が定まり、適切な文理選択、科目選択が行われている⇒独自アンケート、学校評価アンケートで評価(A-大学OGに参加80%、「進路指導についてきめ細かい指導がある」あてはまる・ややあてはまる80%)	・6月に学習実態調査を実施、平日平均144分、週末平均165分という結果であり、目標の180分に及ばずさらなる家庭学習習慣の定着をねらう。懇談資料に含めることで家庭での協力も依頼した。 ・第2回スタサポの質問「進路を考えるときに困っていること」が「自分が何に向いているのかわからない」回答が最多の48.6%となっていた。8月にAnosプログラムを実施し、自己肯定感の向上をはかりながら自分が納得できる選択ができるよう自己理解を深化させた。 ・コロナ対応による欠席者に向けて各教科からChromebookを利用した授業の配信、復習動画や解答例の配信などオンラインでの対応を行った。 ・学部別説明会や文理選択LHRを実施し、適切な進路選択が行えるよう、将来について学ぶ機会を設けた。	B	・第2回学習実態調査では週平均179.3分という結果となり、前回から14.3分増加した(180分以上の生徒は全体の67%)。【A】 ・学校評価アンケート「進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。」に対し、「あてはまる・ややあてはまる」の割合は88.2%となった。【A】	A	A	・学習状況については、各教科担当から学習の仕方や課題の取り組みについて丁寧な指導をされた結果といえる。校外模試での結果からは成績推移はほぼ横ばいか少しの上昇となっており、今後は大学入試に対応できるだけの応用力をつけさせる必要がある。 ・進路決定に関する情報を収集させるため、進路指導課によるオープンキャンパス参加報告、大学研究者調査などの取り組みが行われ、進路決定よりの啓発も行われた。また4回の面接週間を中心に担任との相談も細やかに行われた。

2年団	1「国数英を中心とした基礎学力の向上」 ①国数英で毎日180分以上取り組みさせる。プラス理科・社会の学習を取り組ませる。 ②計画的な学習を行えるように指導する。 2「志望校(群)の決定と大学の特徴を知る」 ①全国の大学の情報等を提供し、岡山大学だけでなく、幅広い大学選択の視点を与える。 ②2年生3学期までに志望校群を決定させる。 ③実力検査・進研模試の成績上位者を対象に、個別指導等を行い、難関大受験者を育成する。	・1年生1月の学習実態調査では週平均146分、国語27.7分、数学56.4分、英語49.6分であった。例年と比べ少ないのが現状である。 ・1月進研模試では偏差値70以上が3名、60以上70未満が62名といった現状である。 ・明確な志望校(群)が定まっていない生徒がいる。学部は決まっているが、学科や専門内容までは決まっていない生徒が多い。有効な情報を入力する術を知らない生徒が多いため、調べ方も教える必要がある。	・課題の目的を明確にし、提出を徹底させる。 ・成績上位層に対し、教科バランス等をもみて、国数英の基本3教科の個別指導を実施する。 ・学年通信や進路通信を通して、全国の大学で研究されている内容などの情報提供を行い、幅広い選択の視点を与える。また、googleサイトを利用し、その情報を蓄積し、いつでも見られるようにする。 ・積極的に課題探究に取り組みせ、自身の進路との関連性や方向性を明確化させる。	1「国数英を中心とした基礎学力の向上」 (学習時間の増加、成績上位層の増大) 評価B⇒学習実態調査(3回)の週平均がいずれも160分以上である。 評価A⇒学習実態調査(3回)の週平均がいずれも180分以上である。 2「志望校(群)の決定と大学の特徴を知る」 (志望校(群)が決まっている、大学について幅広く考えられている) 評価B⇒3学期志望校調査において、第一志望(群)が決まっている生徒が70%を越えている。 評価A⇒3学期志望校調査において、第一志望(群)が決まっている生徒が80%を越えている。 <どちらも評価Aがついて全体評価Aとする>	・7月学習実態調査では週平均112分という結果であり、目標値にはほど遠い結果である。 ・スタサポ2年生1回では、平日学習2時間以上の生徒が53.7%、休日学習3時間以上の生徒が59.8%という結果であった。【C】 ・スタサポ2年生1回では、国公立大学志望者は80.3%、進路が未定という生徒は2.3%であった。学部系統については、5.8%の生徒が未定であった。【B】	B	1 ・11月の学習実態調査では週平均132分と7月の学習実態調査同様、目標に足りていない。各教科の1週間の学習時間の合計の平均については、国語130分、数学288分、英語257分、社会78分、理科144分となっている。また、週平均181分以上の生徒は17%、120分以上の生徒は61%であった。【C】 2 ・11月進路希望調査では国公立大学志望者は91%であった。【A】 ・数学、英語を中心に個別指導(個別添削)を行った。	B	B	・スマホの利用時間が1日平均95分となっており、学習時間の少なさに影響している。3年生になるに向けて、学習意識の向上を図る必要がある。面談等を通して、現状の学力との差や志望校についても話をし、意識の向上を図る。 ・課題が作業になっていることも考えられる。課題の目的を明示することで、進路実現に向けて意識が高まるような働きかけを行う。
3年団	・「受験校の決定」と「全員の進路実現」 ・「一宮高校での学びと進路の接続」	●2年生3月時点での状況 ・「志望校が決まっている」と答えた生徒は、全体の7割であった。 ・「入試の概要を知っているが対策していない」と答えた生徒は6割であった。 ・受験勉強の進み具合について「ペースがつかめず不安や焦りを感じている」「スタートが遅れてしまいかかなり焦っている」と答えた生徒が9割であった。 ・「進学にあたってのこだわり」について希望の学部・学科にこだわりたいと答えた生徒と第一志望校とその学部・学科にこだわりたいと答えた生徒の合計が8割であった。 ●改善の方向性 ・LHRや進路探究の時間を通じて、志望する大学・学部学科とその志望理由、大学での学び、卒業後のキャリアについて考える。	・担任、教科担当、学年主任などによる面談を実施する。 ・大学、学部、学科に関する情報発信する。(進路通信の発行) ・的確な自己分析を行わせ、自分自身の特性に合った入試を選択させる。 ・進路探究(金曜7限)で1年生、2年生の学びを元に、自分史(進路実現計画書や志望理由書)を作成させ、生徒相互面接(個人・グループ)を通じて、進路先で取り組みたいことなどを明確にさせる。	●達成された姿 ・「志望校が決まっている」「入試の概要を知っている」「受験勉強のペースがつかめている」「受験勉強のスタートがきれている」と多くの生徒が答える状況となる。 ●評価Aの基準 ・「志望校が決まっている」と答えた生徒が、全体の9割を越えている。 ・「入試の概要を知っている」「受験勉強のスタートがきれている」と答えた生徒が8割を越えている。 ・受験勉強の進み具合について「ペースがつかめ安心して学習できている」「受験へのスタートがきれている」と答えた生徒が7割を越えている。	●面接週間を中心に担任は生徒の志望校・受験方法決定に向けて、細やかに声かけやアドバイスをしている。また、進路探究で未来の自分史作成を中心に、1・2年次の学びと卒業後の進路との接続を図ってきた。これらに取り組んだ結果、9月に行ったアンケートでは、「志望校が決まっている」と答えた生徒は9割を越える状況である。一方で、「入試の概要を知っている」と答えた生徒は7割にとどまっており、自身の特性に応じた受験方法と具体的な対策について進路研究を深める必要がある。「受験勉強のスタートがきれている」と全員が答えているが、「受験勉強のペースがつかめている」と答えた生徒は3割にとどまっており、「入試の概要と対策」とともに、今後の進路探究や面談などを通じた助言が必要であると考えられる。	B	●9月に行ったアンケートでは、「志望校が決まっている」と答えた生徒は9割を越える状況であり、国公立大学、専門学校などの入試に対して自身の特性に応じた受験を選択し、学校推薦型入試、総合選抜型入試では約6割の生徒が合格している。(2学期末) ●学校評価アンケートでは、「進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。」と「大学との連携事業や講演会など、進路実現に関する行事が充実している。」の進路に関する項目で8割以上の生徒が肯定的に答えており、「担任、教科担当、学年主任などによる面談を実施する。」「的確な自己分析を行わせ、自分自身の特性に合った入試を選択させる。」「進路探究(金曜7限)で1年生、2年生の学びを元に、自分史(進路実現計画書や志望理由書)を作成させ、生徒相互面接(個人・グループ)を通じて、進路先で取り組みたいことなどを明確にさせる。」など目標に対する具体的な方策が効果的であったと考えられる。 ●3年4月と12月に実施したIGアンケートでは全ての項目で進捗が見られており、授業、行事など全ての学校生活を通じてIGを育成することができた。	A	A	●昨年度の「iC進路探究」での改善策としてあげられた「志望理由書の作成への事後指導がクラスによってまちまちだったこと」は、1年次から行ってきた志望理由書記入・添削・リライトを組み合わせた志望理由書サポート講座を外都委託したことでより質の高い指導が行えた。課題としては、より具体的な志望理由を振り下げるためには担任がヒアリングをして志望理由書を完成させる必要があり、進路探究では志望校研究と並行してより明確な志望理由を持たせる取組を模索することが必要だと感じた。また、学びの蓄積が散在しているため、これらをどのように管理をするのかも課題である。

(3) 安心・安全な学校生活の保障

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具体的方策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	関係者評価	結果分析・改善策
教務課	・生徒の主体的、自律的に行動する力を高める。 ・そのための環境整備を進める。	自律的に行動させるために、 ・3学期からSHR連絡事項をクロムブックで行うこととした。 ・時間割変更も試行的に、学年掲示板で各自が確認する方法にした。 ・学校評価アンケートで問「ホームページや連絡文書など(クロムブックを含む)を通して、学校の様子や必要な情報を受け取ることができる」で「よくあてはまる」と答えた生徒が43.1%。	・クロムブックを活用した連絡事項の伝達の推進 ・学年掲示板の活用推進 ・ノーチャイムデーの計画・実施(昨年度より回数増加) ・自習室の設置、整備	①生徒が、連絡事項や時間割変更を学年掲示板やクロムブックで入手し、自律的に行動することができる。 ②ノーチャイムデーを年5回実施した。 A基準:上記に加え、③が達成できた。 ③学校評価アンケートで問「ホームページや連絡文書など(クロムブックを含む)を通して、学校の様子や必要な情報を受け取ることができる」で「よくあてはまる」と答えた生徒が80%以上。	・1学期、学年掲示板による時間割変更連絡を滞りなく行うことができた。 ・9月中旬からは、クロムブックによって時間割変更連絡を配信するシステムに改変し、好評を得ている。 ・1学期は学年ごとの時程が異なる日を2回ノーチャイムデイとした。2学期は2回の実施を計画している。 ・事務室の協力をえて自習室を設置し、半数以上の席がほぼ日常的に活用されている。また、生徒用プリンターも設置した。	B	①9月中旬から、クロムブックで時間割変更を含む連絡事項を配信するシステムに改変し、好評を得た。 ②ノーチャイムデイを年5日以上実施した。ただし、これにより、生徒の自律的に行動する力を育成したとはいえないので、あり方の検討が必要である。 ③「ホームページや来メ、連絡文書を通じて、必要な情報を受け取ることができる」によくあてはまると回答した生徒は39.8%(あてはまるまで含むと、91.5%)であった。問いに「クロムブックや」が入っていれば、より高評価だったと思われる。	B	B	・ノーチャイムデーについては、教職員のアンケートでも賛否両論があり、メリット・デメリットを再検討したい。なお、生徒へのアンケートが実施できておらず、来年度はノーチャイムデーを実施する目的と合わせて生徒の意見を集約したい。
生徒課	・基本的生活習慣を確立させる ・自主性を育てる ・人間性豊かな心を育てる	・学校周辺での交通マナーに関して、毎年苦情が寄せられる中、昨年度は交通委員による交通安全教室を実施したり、継続した注意喚起や交通立ち書きを行ったりすることで、学校自己評価の「ルール・マナー」の肯定的意見の上昇に繋がった。ただ、交通ルール・マナーに関してはなかなか改善されておらず、命に関わることもあるため、引き続き注意を促すとともに、マナーに関しても教員全体の共通認識のもと徹底して指導する必要がある。 ・昨年度は様々な行事や活動において、まだまだ制限されることも多く、学校自己評価の学校行事に関するポイントは2年続けて大きく減少した。コロナの影響で、この2年間で学校行事の内容は大きく変わっているため、新しくより良い方法を考えて出すチャンスととらえ、生徒会を中心とした活動の充実を促していきたい。また、部活動ではHPを新しくするなどし、各部の活動や活躍を全体へ発信することで、更なる主体的な活動へ繋げていきたい。 ・昨年度は、コロナ差別についての啓発や、生徒会による多様性へ配慮した人権意識を高める取り組みができた。生徒会からの要望で、性の多様性に配慮した制服づくりも進んでおり、人権については、今後更に様々な場面を通じた啓発に努めていきたい。また、SNS関連の問題は継続的に起こっており、周囲の心ない言動に傷付いている生徒もいるため、引き続き呼びかけや生徒の人間関係の把握に努めていく必要がある。 ・生徒は、全体的には積極的にボランティア活動に取り組んでいるものの、中にはやらされている、強制されている等の思いを持つ生徒もいることから、社会貢献活動の意義や目的を考えさせる必要がある。	・学校行事やあいさつ運動、ノーチャイムデーなどを通して、ルールの遵守や時間の管理、けじめのある服装、爽やかな挨拶など、当たり前のことが当たり前にできる集団を育てる ・生徒会執行部の活動を支援することで、部活動や委員会活動、各種行事への主体的な取組みができる人間を育てる ・ネットケータイ安全教室やいじめ調査アンケート等を実施することで、互いの人権を尊重し、いじめを許さない集団を育てる ・SSH・ユネスコ委員会の活動を活発にし、ボランティア活動等での、積極的な社会貢献ができる人間を育てる	学校評価アンケート ・「学校行事は充実したものとなっている」「クラスにおける活動は充実している」の項目で肯定的な評価が85%以上。(A基準:90%以上) ・「生徒会活動や委員会活動は活発である」の項目で肯定的な評価が80%以上。(A基準:85%以上)「希望する部活動があり、活動は充実している」の項目で肯定的な評価が85%以上。(A基準:90%以上) ・人権教育の項目で、肯定的な評価が80%以上。(A基準:90%以上) ・社会貢献の項目で、肯定的な評価が80%以上。(A基準:85%以上)	・新型コロナウイルスの感染拡大があったが、銀杏祭文化の部、体育の部とともに当初の計画どおり生徒の活動ができた。 ・文化委員会と体育委員会から行事中でのスマートフォンの利用についての要望があり、生徒が主体となって条件を考えてきたものを許可するなど、自主的な活動を支援することができた。 ・教職員、保護者、生徒会執行部からなる制服検討委員会で、来年度から導入予定のLGBTQに配慮した制服を検討している。 ・夏季休業を中心に、学校行事や一宮公民館との連携によるボランティア活動を多くの生徒が行うことができた。	B	・銀杏祭文化の部や体育の部をはじめとする学校行事に関して、若干の規模の縮小があったものの、当初の計画どおり生徒の活動ができたことから、昨年度より大幅な評価の向上につながった。(生徒の肯定的な評価 89.1%) ・各種委員会の要望にもとづいて、生徒が主体となって条件を考えてきたものを許可するなど、自主的な活動を支援することができた。(生徒の肯定的な評価 77.2%) 部活動に関しては、コロナウイルス感染症の影響から活動停止などの行動制限があったことから、評価が低下した。(生徒の肯定的な評価 87.4%) ・LGBTQに関する人権研修を昨年度に引き続き実施してきたが生徒評価が低下した。力を入れてきた項目だけに残念である。(生徒の肯定的な評価 80.7%) ・夏季休業や休日を利用し、課題探究や学校行事、一宮公民館との連携によるボランティア活動に多くの生徒が参加した。昨年度に加えパソコン教室や脱み聞かせなど行うことができた。多くの生徒が参加しているものも関わらず目標数値に達していない。(生徒の肯定的な評価 86.9%)	B	B	・学校行事や研修会をとおして、生徒の主体的な活動を促し生徒自ら「ルールやマナーの遵守」や「時間の管理」、「けじめのある服装、爽やかな挨拶」など、当たり前のことが当たり前にできる集団をめざして指導を続けてきたが満足できる結果に届かなかった。多くの評価項目で目標値は超えたものの評価Aには至っていない。 ・多くの生徒は、学校生活を充実したものにし、学校行事やボランティア活動に取り組んでいるが、中にはやらされている、強制されている等の思いを持つ生徒もいることから、学校行事や社会貢献活動の意義や目的を考えさせ、生徒全体の取り組みとなるよう指導していきたい。 ・来年度は、今年度特に力を入れて取り組んできた制服の改定に伴う「人権に配慮した行動」についての項目での生徒評価が下がったことから、「人権に関すること」「命に関わること」を中心に生徒の意識の向上や行動改革につながる取り組みを行っていきたい。

厚生課	・基本的な生活習慣を確立させ、健康意識を高め、疾病予防などの自己管理ができる。 ・清掃活動を通じて、学習環境を整え校内美化・整備を推進する。 ・安全点検を実施し、確実かつ速やかに異常箇所の発見・補修に努める。 ・心身の健康への意識を高めるための、保健LHRを実施する。 ・防災意識を高め、災害時に適切な行動ができるように防災訓練を行い、防災冊子の作成をする。	・身体計測、各種検診は正しく実施できている。治療指示書の提出率は県平均と比べて十分高い。配布後の個別指示などを適切に行うことで現状を維持していくことが大切。 ・清掃活動は通常時、一斉清掃、念入り清掃それぞれ十分に行われている。整備・防災委員による点検も十分に実施されている。教員減により監督場所が広がり、毎日清掃をできない部分が出てくる。清掃回数が減っても質を落とさない活動が必要になる。 ・安全点検の結果報告が十分でない。修繕依頼などは出てくるので危険箇所が見逃されてはいないだろうが、報告の出しやすいシステムを考える必要がある。昨年度PGによる入力での報告に変更したが、改善にはつながらなかった。 ・保健LHRは正しく実施されており、生徒の健康意識を高めることにつながっている。講師や実施方法を考えながら、さらなる意識高揚へつながらよう保健LHRを実施する。 ・新型コロナウイルスのため、十分な避難訓練が実施されていない。しかし教室などでの活動により防災意識は高めることができた。今年度も状況に応じた防災訓練を実施する。防災冊子はChromebook上での配布となった。いつでも携帯端末から見ることででき、より利用しやすくなっていると思われる。	・身体計測や各種検診を行い、自分自身の健康状態を十分に理解させる。検診結果を伝え、必要なものには治療指示書を渡し通院を促す。 ・清潔な環境作りを日々の清掃活動を通じて行う。一斉清掃、念入り清掃なども行事等に合わせ実施し、学習環境を整え校内美化・整備を推進する。清掃点検を実施する。 ・全教員による安全点検を実施し、その結果の報告を受ける。 ・保健LHRを実施する。 ・防災訓練や防災冊子の作成を適宜見直しを行いながら実施し、教職員や生徒の防災意識の高揚をはかる。	・すべての計測、検査が正しく実施でき、治療指示書の配布や受診指導が十分に行われ、生徒自身が自己管理ができるようになる。(治療指示書の提出率が60%以上)A基準:70%以上 ・通常時の清掃活動や行事に合わせた特別清掃などが十分に実施され、校内美化が十分に保たれる。(生徒による校内美化に関するアンケートで満足度80%以上)A基準:90%以上 ・安全点検を正しく実施し、その結果が期限内に報告され、異常箇所が速やかに発見・修繕される。(安全点検結果報告の期限内提出80%以上)A基準:100% ・保健LHRを実施することで、生徒の健康意識が高まる。(生徒による健康意識に関するアンケートで肯定意見80%以上)A基準:90%以上 ・状況に合わせた防災訓練を実施し、生徒の防災意識が高まる。防災冊子を完成させ職員へ配布する。(生徒による防災意識に関するアンケートで肯定意見80%以上)A基準:90%以上	・予定された計測、検査は正しく実施できた。受診指導も十分に行われている。治療指示書については現在は70%を超えていないが、夏期休業中に受診したものが今後提出されてくると予想される。 ・清掃活動は十分に実施されており、廊下階段などの細部に不十分な部分もあるが、全体として校内美化は十分保たれている。 ・安全点検結果の報告はまだ100%とはならない。期限までの提出は70%台であり、期限後の提出を合わせるなど90%台となっている。 ・保健LHRは10月の末から11月の中頃にかけ実施の予定である。 ・防災訓練は正しく実施されている。10月にも実施予定である。	B	・治療指示書の提出状況は項目ごとに差があるが、まとめると80%台にとどまる。B ・清掃活動は十分に実施されており、アンケートによる清掃活動の満足度は90%以上であった。A ・安全点検結果の報告は12月まででは100%になる月はなかった。期限内の提出は70%程度、期限を超えて当月内の提出率は90%を超える程度であった。C ・保健LHRは予定通り実施された。実施後のアンケートでは健康意識の向上に繋がったという意見がほぼ100%であった。A ・防災訓練は予定通りすべて実施された。実施後のアンケートでは防災意識の向上に繋がったという意見がほぼ100%であった。A	A	A	・特に視力に関しての治療率が高くない。引き続き生徒保護者へ継続的に受診勧奨を続けたい。 ・取組は真面目にされており、意識も高い。このままの状態を保ちたい。 ・数名の者を除ききちんと点検と安全点検カードの提出はできている。数名への個別の対応で100%にしたい。 ・予定通りに行え、その意義も十分に伝わっている。今後も内容を充実させながら実施していく。 ・防災意識の向上は十分にできている。今後は新型コロナ等の関係で実施できていない、実際に避難をする練習をしておきたい。
図書課	・安心・安全な学校生活の保障 ・生徒による主体的、自律的な行動の活性化	・消毒スプレーやパーテーションの設置をしている。生徒も私物の管理などマナーを守って図書館を利用している。 ・文学散歩やブックハンティングは出来なかったが、図書委員会は活動が制限される中でも工夫して広報活動に励んだ。 ・生徒のアイデアも盛り込み、SDGsコーナーを設置した。 ・図書館だよりを毎月発行し、図書を紹介をした。 ・教務課との共催により、創立記念行事・芸術鑑賞会を実施することができた。	・感染症対策に配慮した図書館運営 ・図書委員会の活動の活発化 ・図書館ギャラリーの活用 ・芸術鑑賞の円滑な運営	・図書委員会による図書館ギャラリーの充実。 ・SDGsコーナーなど生徒の意見を取り入れた図書館活動の活発化。 ・芸術鑑賞の円滑な運営。	・県立図書館の施設見学とブックハンティングを再開することができた。 ・図書委員会で、図書館便りの発行とギャラリー展示の模様替えを毎月実施している。 ・クラスルームを開設して委員会活動の連絡や広報活動に活用している。	B	・図書館ギャラリーや掲示板を利用して、図書委員会での展示や生け花や絵などの展示を行った。 ・ユネスコ部や委員会の活動や制作物の展示などを行った。 ・ギャラリーの前で足を止めて、観覧する生徒は多かった。アンケートの結果、図書館ギャラリーを見る生徒の割合は40%であった。 ・シンフォニーホールで芸術鑑賞会を実施し、教職員、生徒とも好評であった。 ・リクエストに応じて、県立図書館の本を仲介したり、新たに書籍を購入したり、雑誌の定期購入をおこなった。	A	A	・来年度の創立記念行事は講演会になる。内容の検討を進める。SDGsに限らず、授業や部活動に貢献できるよう各情報を充実させと教員生徒に対する案内や通知が認知されるよう工夫していく。 ・図書館の来館者数を把握したい。
教育相談室	1. 生徒や保護者に対して安心できる場の提供、精神的サポート及び人間関係の調整、他機関との連携。安定した学校生活の支援。 2. 学校全体の支援体制を整える。教職員間の連携を図る。 3. 多様な生徒の理解、支援の資料、相談の場の提供。	・中学校、保護者との連携に努め、入学前の情報収集に力を入れている。(サポートシート) ・発達障害の有無、学校生活で配慮すべき生徒についての情報が得られている。 ・心理検査i-check(1年生・2年生)Ai-grow(3年生)の分析。学年、クラス状況、要支援生徒(注視すべき生徒)の顕在化と共有。 ・相談室係会での情報交換、学年団へ繋げる。	・定期的に月1回相談室係会(相談室長、特別支援コーディネーター、学年主任、養護教諭、学年相談室係、SSW)を開き、欠席状況、SC面談内容等の情報交換、共有。 ・SSWの相談室係会への参加調整。外部相談機関の紹介、注視案件の対処方法など相談。 ・1・2年生心理検査i-check(5月、11月)3年生心理検査Ai-grow(5月または11月LHR)を実施予定。家庭、学校での居場所、その居心地、親子・友人関係の把握。不登校、人間関係の孤立を防ぐ支援。 ・生徒課と連携、いじめ防止・早期発見に努める。 ・教員研修8月(人権・教育相談)実施。 ・相談室係会で全学年注視すべき生徒情報の交換と共有。 ・相談室便りの積極的発行。生徒・保護者へ相談室の広報と生徒(子ども)への多様な視点、考え方を伝える。	・心理検査(i-check・Ai-grow)を用いた生徒把握。親子関係の把握。不登校、孤立防止。生徒の自立・自己肯定感を高める援助。 ・相談室便りを年間8回発行。保護者へ多様な価値観の提示。相談室活動の広報。 ・STANDBYの情報注視。問題の早期発見。(生徒課と連携) ・サポートシート活用。中高連携、保護者と情報共有。 ・月1回の相談室係会で情報交換。迅速なケース会議の設定。問題の深刻化防止。担任、生徒、保護者へ心的な負担軽減を図る支援。	・相談室係会を月1回定期的に開き、学校全体の注視すべき生徒の情報共有を行っている。SSWにも参加していただき、外部相談機関の紹介や対応方法などの助言をいただいている。全学年において、長期欠席者が数名おり、それぞれの心的な負担軽減を図る支援を多面的に行っている。 ・月毎の欠席調査を行い、配慮が必要な生徒の動向を共有している。 ・SCや学校医が行うカウンセリングの情報を共有している。また問題を抱えている生徒、不登校生徒、保護者との個別面談、ケース会議を行い、支援や助言を行っている。外部相談機関の情報なども随時提供している。 ・1・2年はi-check、3年はAi-grow心理検査1回目を実施した。年度始めでの生徒の状況把握資料として本人・保護者に個人シートを配布した。一つの視点として、参考になる部分もあったように感じている。 ・HPでのカウンセリング等案内、「相談室便り」の定期的な発行により、保護者へ子どもとの関わり方、多様な価値観の提示、相談室活動の広報と理解を促している。	B	・相談室係会を月1回、年間11回実施。係会メンバーとSSWで学校全体の注視すべき生徒の情報共有を行った。 ・月ごとの欠席調査のための入力フォルダを作成した。各クラス担任に入力をお願いし、配慮が必要な生徒の動向を共有するとともに、県調査への正確な報告を行った。 ・SC、SSW、学校医と連携し、精神科医療機関との情報共有や外部相談機関の紹介・対応方法などの助言を行った。 ・カウンセリングを希望する生徒の増加に伴い、SCを9月から2月に4回追加実施した。今年度より、コンサルテーションに担任が参加する形をとった。 ・教職員研修「生徒の生きづらさへの対応」8月実施。講師の先生に起立性調節障害を中心とした話をいただいた。 ・問題を抱えている生徒や不登校生徒を持つ保護者と個別に面談を行った。 ・1・2年はi-checkを5月と10月の2回、3年はAi-grow心理検査を1回実施した。注視する生徒の明確化と変動の共有を行った。生徒個別シートは保護者と生徒に渡した。 ・HPでのカウンセリング等案内、「相談室便り」の定期的な発行により、保護者へ、子どもとの関わり方や多様な価値観の提示、相談室活動の広報と理解を促した。 ・「学校評価アンケート」教育相談項目において、評価指数は前年度より向上した。しかし、肯定的な評価が、T20において評価が96.9%で高評価であるものの、P14においては69.7%、S15においては81.4%であり(全体としては83.3%)、「悩みを相談しやすいような環境や機会」について見直しが必要である。	B	B	・入学時に発達障害など診断のある生徒も増加傾向にあり、年度途中に「起立性調節障害」の診断が下りた生徒もいる。また、自らの力で他者との関係を改善したり、再構築することができない生徒の増加も見られる。それぞれの特性に合った指導が求められているのが現状である。 ・今後強化すべき点は、まず、研修などを通して、支援が必要な生徒への対応方法を教職員で共通理解すること。次に、i-check等心理検査の結果を分析したり、日々の観察を行ったりすることの重要性を全教員が認識できるよう努めること。また、不登校傾向のある生徒へのより良いアプローチ方法や保健室在室時間など、個々の生徒に応じて柔軟な対応ができるよう努めること。以上3点を中心に、教育相談が生徒・保護者・教員など関わるすべての人がよりよく生きていけるようなサポートの場になることを大切にしたい。
事務室	・築後40年を超え、老朽化が目立ってきている中、本庁担当課と協議しながら改善を図るとともに、校内美化を推進するなど安心・安全で質の高い教育のための環境の維持・整備を図っていく。	・〇老朽化等に起因する危険箇所への早期対応はもとより、対応が求められている施設・設備、備品等についての実現可能性を検討していくとともに、校内美化環境の維持・管理についても促進していく。	・〇施設・設備の更新等に関して、要望の実現可能性も検討しながら、急を要する事業から計画的に修繕等を行うとともに、校内環境維持を進めていく。また、授業改善に資する備品、校内環境整備、安全防災に関する用具等の整備を行っていく。	・〇生徒の学習環境の改善が図られている。	・〇今年度は、早急な修繕を要する浄化槽関連のトラブルが連続して発生している中、第1棟4階女子トイレの洋式化への改修については、予算化されたところである。引き続き、トイレの改修を最優先に校内環境整備を進めていく。	B	・〇電気代の高騰により運営経費が圧迫される中、浄化槽関連の修繕や老朽化対応に取り組むとともに、環境整備として女子トイレの一部洋式化や修繕を繰り返しながら使用していたグラウンド整備のためのトラクターの更新を行った。 ・また、令和5年度本格工事となるが、第2棟1階から4階のトイレの大規模改修について予算化され、今年度中の実施設計の完成を目指しているところである。	B	B	・〇老朽箇所が目立ち始め、生徒・保護者からの改修要望と現実的な予算配分とのギャップが埋まらない状況がある。 ・そうした状況の中、環境改善に向けた増額要望を継続していく。

(4) 外部から信頼される学校づくりの推進

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具体的方策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	両年度評価	結果分析・改善策
総務課	校内外へ向けて、本校が取り組んでいる内容を、わかりやすく発信して、一高サポーター(保護者・同窓会・地域社会等)を増加させ、関係性をより強いものとする。	授業紹介ページで探究の授業を紹介するページがあるが、まだ少ない。各教科に協力してもらいながら、少しずつ増やしていく。 部活動紹介ページの更新も随時行っているが、部によっては更新が滞っていて、情報が古いものもある。係から働きかけ、2ヶ月に1度くらいは更新していく。 学校公式のFacebook、Twitterを活用し、SNSを活用した情報発信も行っており、広報において効果的に機能している。 プレゼン内容は、各課等に協力をいただきながら改訂を繰り返すことで、わかりやすいものを作成できている。 感染症対策を行いつつ、学校説明会を2回、中学校教員対象入試説明会を1回、オープンスクールや入試説明会を実施した。 こ2年間はコロナによる学校行事の中止が相次ぎ、新しい写真や映像が使いにくかったため、写真が古いものが多い。マスク姿であっても新しい写真に更新していく。オープンスクールは何とか実施できたが、いつ通常実施できなくなるか分らない状況だった。	1 ホームページの充実 (1)各教科の授業紹介動画を増やす。 (2)部活動紹介ページを随時更新する。 (3)各学年・各課・各科・生徒会等との連携。 2 各種説明会への積極的参加と効果的なプレゼンの工夫 (1)学校紹介会のプレゼン内容の再編集。 (2)各分掌、生徒会等との連携。 3 コロナウィルス感染症対策を講じた上で、オープンスクールや学校説明会を計画・実施する。また、コロナ等のため通常実施ができないことも想定し、オンライン実施、YouTube配信の検討をする。	1. 授業紹介ページや部活動紹介ページが随時更新されている。 2. プレゼン資料が中学生や保護者、中学校の教員等にとってわかりやすいものになっている。 3. コロナウィルス感染症対策を講じた上で、オープンスクールや地区別説明会を実施できている。結果、学校紹介動画が完成し、オープンスクール、中学校教員説明会で上映した。 3. 7月に2回、学校説明会を実施した。コロナ対策のため、昨年と同様に研修室ではなく体育館で実施した。8月に第1回オープンスクールを実施した。在校生との座談会では1教室20名以内、小グループでの懇談を選んだ。教員減の状況下、昨年よりも講座数を増やし募集人数を30名増やした。駐車場に業者を入れた。8月に中学校教員対象学校説明会を実施した。コロナ対策のため、授業見学をカットした。OSでの生徒会長挨拶、学校説明会での卒業生の話の動画を見ていただいた。3年学年主任より、一宮高校での生徒の夏容について紹介した。	1. 授業紹介ページの更新が進んでいない。部活動紹介ページは随時更新されているが、情報が古い部活動もある。更新が滞っている部活動に関しては、顧問に確認をとった上で校誌「いちのみや」の文章の掲載を検討する。 2. 教務課、進路指導課、SSH戦略室が作成した上で、オープンスクールで検討した上で、本年度用のプレゼンが作成できた。生徒会に依頼した学校紹介動画が完成し、オープンスクール、中学校教員説明会で上映した。 3. 7月に2回、学校説明会を実施した。コロナ対策のため、昨年と同様に研修室ではなく体育館で実施した。8月に第1回オープンスクールを実施した。在校生との座談会では1教室20名以内、小グループでの懇談を選んだ。教員減の状況下、昨年よりも講座数を増やし募集人数を30名増やした。駐車場に業者を入れた。8月に中学校教員対象学校説明会を実施した。コロナ対策のため、授業見学をカットした。OSでの生徒会長挨拶、学校説明会での卒業生の話の動画を見ていただいた。3年学年主任より、一宮高校での生徒の夏容について紹介した。	B	1. 授業紹介ページの更新ができていなかった。部活動紹介ページはほぼすべての部活動が更新できた。ブログなどではこまめに情報発信している部活動もある。SSH事業、理数科の活動は即時性をもって発信した。 2. 中学校、塾への説明会で、新しいプレゼン、学校紹介動画をうまく活用できた。募集だった学校紹介動画は、写真やデータも新しくなり質が高かったが、「ページ送りが早くて、説明文が読み切れない」という指摘もあった。 3. 10月の第2回オープンスクールでは、中学生に授業の様子を見学してもらった。中学生、保護者ともに希望が多かった部活動見学も実施できた。 中学生の志願倍率は、12月の調査で1.40倍(昨年度最終1.29倍)。最終1.36倍。	A	A	1. 部活動紹介ページは、原則として校誌の原稿を年度末にアップする。特に困る部に関しては、事前に係まで申し出ていただきそれに代わる原稿を出していただく。年度初めには、これまで通り顧問に対して更新を促す。更新されなくても毎年最新の校誌のデータになっている。 2. 動画の調査をする。 3. オープンスクールは定員を設けているが、参加登録の入カミスなどで、参加希望の中学生がエントリーできないケースがある。オープンスクールは中学生のみ参加、学校説明会は保護者対象、のように棲み分けを検討したい。

教務課	・保護者、同窓会、地域等との連携強化	・春と秋に授業参観を実施できたが、3年生の保護者への公開が一度もできなかった。各学年、一度は参観できる機会を設けたい。 ・地域の方も参観できるような企画ができたかと考えるが、コロナ禍により困難かも。 ・学校評価アンケートの間「本校のホームページや連絡文書等を通して、学校の様子や必要な情報を受け取ることができる」で「よくあてはまる」と答えた保護者は43.1%	・適切な時期を見極めながら、公開授業を企画、実施し地域を含む参観者増加に努める。 ・4月の球技大会を1年生保護者対象 ・4月のアンスプログラム(LHR)(午後に実施)3年生保護者対象 ・秋の探究デーに合わせて1・2年生保護者対象	①各学年1回以上、保護者対象の公開授業を実施することができた。 ②1年生の保護者に対しては、3観点による学習評価のしかたについて文書で提供することができた。 評価Aの基準：上記に加えて③を達成できた。 ③学校評価アンケートの間「本校のホームページや連絡文書(および授業公開)等を通して、学校の様子や必要な情報を受け取ることができる」で「よくあてはまる」と答えた保護者が50%以上	・4月に3年生の授業公開(32名)、5月に1年生(球技大会)の授業公開(113名)を実施した。 ・アンケートの集約も行い、振り返りもできた。(おおむね好評をえた。) ・11月の探究デーの授業公開も計画中。 ・1年生とその保護者に学習評価について、情報提供することができた。	B	①各学年1回以上の授業公開日を設けることができた。 4月の3年生は32名、5月の1年生(球技大会)は113名、11月の1・2年生は2日で139名が参観。 アンケートの集約も行い、おおむね好評をえた。 ・11月の探究デーの授業公開も計画中。 ②1年生とその保護者に学習評価について、情報提供することができた。 ③評価アンケートで「授業公開やホームページ、来メ、連絡文書を通じて、学校の様子や必要な情報を得ている」に、よくあてはまると回答した保護者は37.8%(あてはまるまで含めると89%)であった。	B	B	・授業公開に参加した方のアンケートでは、授業公開の機会増加を要望する声が少ないので、コロナの状況をみて、さらに充実をはかりたい。
厚生課	・地域の環境美化への貢献 ・地域防災への貢献	・地域の方にはおおむね好評を得ている。現在は活動場所や地域との交流が制限されていることと、比較のきれいな場所であったりすることで生徒の満足度があまり上がらない場合がある。生徒が充実感を得ることができ、継続して地域に貢献する意識が高まるような活動を実施したい。 ・現在まで避難所としての活用は無い。そのときには迅速に対応できるようにしておく。	・クリーン作戦などの機会を捉えて、社会貢献活動に積極的に参加する。 ・岡山市緊急避難所兼避難所指定として貢献する。	・地域と協力した環境美化活動の実施。(生徒による地域貢献に関するアンケートで肯定意見80%以上) A基準：90%以上 ・岡山市、指津地区からの要望・要請に、迅速に対応する。(評価の基準は設けない)	・地域でのクリーン作戦を10月に実施の予定である。 ・現在まで避難所としての活用はない。	B	・クリーン作戦は予定通り実施された。活動に対する生徒の充実度は8.6点(10点満点)であり、高い評価を得ているが、前年度よりは0.5ポイント下がっている。B 現在まで避難所としての活用はない。	B	B	・活動自体は外部との協力もでき生徒の満足度も高くよくできている。しかし現状に満足せず、より地域と良い関係が作れ、生徒の満足度も上がるように活動場所や日程など工夫を考えていきたい。 ・今後も十分な準備をしておきつつも、避難所を必要とする災害が起きないことを願う。
理数科	理数科が取り組んでいる内容について、校内外に発信し、理数科の特長を理解していただく	・学校自己評価アンケートで理数科の特長がみられないという指摘があった。 ・学校ホームページの理数科のページが更新されていない。 ・ブログで理数科の取り組みを発信する回数が少なかった。	・職員会議等で理数科の取り組み内容を報告する機会を増やす。 ・学校ホームページの理数科のページを更新する。 ・理数科の取り組み内容を学校ホームページのブログで発信する。	・職員会議で年間1回以上理数科の取り組み内容が報告されている。(A:3回) ・学校ホームページの理数科のページが更新され、行事や学校設定科目の内容がわかりやすく公開されている。(A:理数科の全てのページが更新されている。) ・学校ホームページで理数科の記事のブログが年間10回以上発信されている。(A:15回)	・職員会議で4月に2回、6月に1回、発言を行い、取組内容を報告した。年度末に、行事等を一覧にして、報告・説明する予定である。 ・学校ホームページの理数科のページは更新されていない。2学期に行う予定である。 ・学校ホームページで「理数科長のつぶやき」というタイトルで理数科行事等を紹介するブログを開設した。4月に4回、5月に3回、6月に1回、7月に2回、8月に2回の計12回発信している。	B	・職員会議で4月に2回、6月に1回、発言を行い、職員朝礼では数回、取組内容を報告し、理解と協力を求めた。年度末に、行事等を一覧にして、報告・説明する予定である。 ・学校ホームページの理数科のページは更新できなかった。 ・学校ホームページで「理数科長のつぶやき」というタイトルで理数科行事等を紹介するブログを開設した。4月に4回、5月に3回、6月に1回、7月に2回、8月に2回、9月に1回、12月に2回の計15回発信した。	B	B	・職員会議や職員朝礼での報告や呼びかけを行った結果、昨年よりは理数科の取り組みを理解している先生方は増えたと考える。 ・学校ホームページの理数科のページは更新できなかった。 ・学校ホームページの理数科のページは更新できなかった。 ・学校ホームページで「理数科長のつぶやき」をシリーズ化したことで、HPを見てくれる方々にはわかりやすくなったと考える。来年度は、回数を増やしたい。
地域連携担当	地域の環境美化、防災、教育支援等へ貢献するため、町内会や公民館、近隣の小中学校との連携を強化する。(コミュニケーション力・自律的に行動する力・垣根を越える力)	・コロナウイルス感染症の影響により、多くの行事が中止や縮小を余儀なくされるなか、一宮公民館とは良好な連携ができているが、他の機関との連携をすすめることができていない。包括支援センターや福祉事務所、町内会との連携を推進する必要がある。	・現在、一宮公民館との効果的な連携ができているが、一宮公民館以外の団体、町内会などとの連携が不十分である。一宮公民館との連携を核として、岡山市北地区包括支援センターや福祉事務所等との連携を推進するとともに、町内会との連携を図る。	・一宮公民館との連携を核とし、一宮公民館をととして他の施設や団体との連携を深め、課題探究をはじめとする地域の課題解決を目指した研究や研修講座が実施できる。 評価Aの基準 一宮公民館以外の団体と連携ができる。	・夏季休業を中心に、一宮公民館と連携した「防災ボランティア養成講座」や「パソコン講座」を本校で実施できた。また、一宮公民館で「読み聞かせ」や「科学実験教室」を行うことができた。9月には、一宮公民館で「プログラミング教室」を行うこととしている。 ・桃ヶ丘町内会に出向いての「防災研修」を行う予定である。	A	・夏季休業と休日を中心に、一宮公民館と連携した「防災ボランティア養成講座」や「パソコン講座」を本校で実施できた。また、一宮公民館で「読み聞かせ」や「科学実験教室」、「プログラミング教室」を行うことができた。また、課題探究のグループが研究成果発表会を行うこととしている。 ・桃ヶ丘町内会や中山中学校に出向いての「防災研修」を行う予定であったがコロナウイルス感染症の影響で中止となった。一宮公民館を介して、交流先が広がっている。	A	A	・一宮公民館をととして他の施設や団体との連携を深めることができつつある。コロナウイルス感染症が収束し、通常通りの活動ができるようになれば、交流の幅がさらに広がっていくと考えられる。 ・課題探究においては、地域の課題解決を目指した研究が少なくなっていることから、継続研究の推進やテーマ設定時での指導が必要である。

(5) 教育体制の整備・拡充

担当	各課・室・係の目標	昨年度までの状況(課題)と改善の方向性	具 体 的 方 策	達成された姿・達成状況	中間の取組結果	中間評価	最終の取組結果	最終評価	関係者評価	結果分析・改善策
教務課	・行事予定、組織成、教育課程、時間割、成績処理入試業務、学校要覧等の文書作成などの教務業務を着実にこなす。	・大きなミスなく遂行できている。 ・労力削減のための工夫がさらに望まれる。	・教務課員で情報共有を深め、点検しながら業務を進める。 ・省労力化に向けてのアイデアを提案し、試行をはかる。	①年間の教務業務を大きなミスなく、着実に遂行することができた。 ②昨年より課内の省労力化を進めることができた。 ③教育課程が令和7年共通テスト(「情報」の出題有無)に対応したものとして確定した。 評価Aの基準：上記に加えて④を達成できた。 ④教務課員が自主研修として、全体に案内しての授業実践や実践報告を1人1回以上行った。	・これまでのところ、教務業務について、ミスなく、着実に行うことができている。 ・時間割変更のやり方、生徒・職員への伝達方法の改変により、少しでもあるが、省労力化を進めることができている。 ・自動採点システム活用促進に向けての講習会を実施し、その活用と全職員の省力化に寄与することができた。 ・自主研修としての授業実践は1名が実施。	B	①教務業務について、大きなミスなく、着実に行うことができている。 ②時間割変更のやり方、生徒・職員への伝達方法の改変などにより、省労力化を進めることができている。 ・自動採点システムの導入と研修により、採点業務の省力化に寄与することもできた。 ④自主研修としての教務課授業実践は動きかけ不足だった。	B	B	・欠課時数の確認などに危うさもあった。ミス未然防止のための策をさらに検討したい。また、内規の中で実際に合わない部分があるので、内規の見直し・更新もはかりたい。
理数科	理数科の学校設定科目や行事の実施内容や実施状況を分析し、理数科内で協議して、さらに充実したものになるよう改善案を提案する。	①理数探究の指導方法は各分野で統一されていない面もあった。卒業生の活用はできていない。 ②行事によっては実施前と実施後のアンケートを行い、改善案を提案した面もあったが、できていない面も多い。 ③1年生の学校設定科目は4観点で評価を行っていた。多くの学校設定科目で「指導と評価の一体化」の面では、できていないところもある。	①理数探究は、進め方(指導方法も含む)を各分野である程度統一し、卒業生の活用などを検討する。 ②学校設定科目や行事について、実施前、実施中、実施後のアンケートを生徒向けと教員向けを実施し、分析材料とする。 ③サイエンスフィールドワークとインキューションラボについては、新しい評価方法を検討する。	①各分野である程度統一して計画的に理数探究の指導ができる体制ができている。(A:かつ、卒業生の活用が行えている。) ②学校設定科目や行事について、実施前、実施中、実施後のアンケートを生徒向けと教員向けを実施して、分析している。(A:かつ、改善案を提案している。) ③サイエンスフィールドワークとインキューションラボについては、評価方法の検討がなされている。(A:新しい評価方法が確立されている。)	①各分野で統一した指導ができるよう毎週行われる理数科会議で情報の共有に努めている。2学期にさらに統一した指導を追求したい。卒業生の活用は、SSH戦略室の方で中断したので、今後の活用は難しい。 ②学校設定科目や行事について、実施前、実施後のアンケートを生徒向けには実施したが、教員向けは実施できていない。2学期に改善したい。 ③サイエンスフィールドワークとインキューションラボについては、評価方法の検討を行い、実施中である。2学期に担当者が集まって今後に向けて会議を行う予定である。	B	①分野で統一した指導ができるよう毎週行われる理数科会議で情報の共有をした。科目の特性を尊重しつつ、統一した指導もできる体制ができた。卒業生の活用は、SSH戦略室の方で中断したので、活用はできなかった。 ②学校設定科目や行事について、実施前、実施後のアンケートを生徒向けには実施したが、教員向けのアンケートは実施できたものとできなかったものがある。 ③サイエンスフィールドワークとインキューションラボについては、評価方法の検討を行い、3観点に対応する形とした。	B	B	①科目の特性を尊重しつつ、統一した指導もできる体制を今後も継続したい。卒業生の活用は、何らかの方法で来年度は実施したい。 ②全ての学校設定科目や行事について、実施前、実施後のアンケートを行い、分析することが重要だが、時間に余裕がない面もある。他業務も含めて時間を確保することが課題である。 ③評価については、さらに検討を続け、指導と評価の一体化ができるよう努力する予定である。
事務室	総務・財務等の専門性を活かし、喫緊の課題と県教育行政の動向に対応しながら、学校を支える柱の一つとして事務室を位置づけ、学校経営目標・計画達成のためのサポートを行っていく。	○新型コロナウイルス感染症の状況に応じて、迅速かつ臨機応変に対策を行うとともに、通常、感染予防対策に必要な物品等の確保を行っていく。 ○従前どおり、適宜、学校徴収金収支状況を確認することなどにより、適正な執行を行っていく。 ○引き続き教職員、生徒、外部訪問者を問わず、最後まで真摯に対話をすることのできる事務室環境を目指す。	○昨年度に引き続き、未だ収束の見えない新型コロナウイルス感染症に対し、事務室として、状況に対応した最善の対応策を実施していく。 ○学校徴収金については、生徒に対する還元であることを念頭に置き、説明責任が果たせるよう有益な執行を行うとともに、適宜、執行状況の確認を行っている。 ○引き続き教職員にとって気軽に相談できる風通しのよい事務室環境の構築と外部訪問者や生徒に対し丁寧な対応できる体制づくりを図っていく。	○本校に起因する教職員の新型コロナウイルス感染者がゼロである。 A基準：本校が発生源となる新型コロナウイルス感染者がゼロである。 ○生徒への還元と保護者が褒賞を生じない執行体制を維持する。 A基準：予算の執行について、明確に回答することができる ○相互理解ができる環境が構築できる。 A基準：全職員から相談しやすい事務室と認識されるようになる。	○新型コロナウイルス感染症について、消毒液の増設やパーティションの追加購入など、ハード面の整備については整ってきている。今後は、オンライン授業等がスムーズに入るような方策についても検討していく。 ○生徒数に伴い、収入額が減少しているのに対して、電気代は上昇傾向にあることから、節電を呼びかけるとともに、従前以上に支出内容を精査し、必要があれば支出協議もを行っている。 ○教職員間のコミュニケーションはとれていると感じている。ただ、生徒、外来者等の意図対応に対して、丁寧な対応を行うよう心がけているが、時折、職員の対応が充分でないと感じる場合があることから、その際には、どこに問題点・課題点があり、どのように改善をすればよいか協議を行うようにしている。	B	○新型コロナウイルス感染症対策として、今年度はオンライン授業に向けた環境整備に重点を置き、普通教室をメインに約30台のプロジェクターの整備・更新をはじめ、L教室への大型モニターの設置やWi-Fi環境のない教室へのルーターの設置などを行った。 ○生徒数の減少による収入減が、年度末における執行に影響しないように、随時、収支の状況を確認しながら適正な執行を行ってきた。 そのような執行体制の中で、グラウンド整備用のトラクターの更新を行うこともできた。 ○事務室職員同士の意識の啓発もあり教職員をはじめ、来校者、生徒に対しても丁寧な対応を心懸けることができている。 ただし、時折、一部職員に不十分な対応がみられることもあり、その際にはその場で注意・指導を行うこととしている。 引き続き、事務室によって学校の最初のイメージが決まるという自覚を持って業務に取り組んでいきたい。	B	B	○県内県立高校の中でも、オンライン環境の整備は進んでいる部類ではあるが、まだまだ改善点も発見されることから、引き続き環境整備の充実を図っていく。 ○学校徴収金については、改善点等があれば対応策を検討することとし、常に適正な執行に向けた体制づくりを図っていく。

令和4年度学校評価の概要

- 1 実施時期 令和4年11月下旬～12月下旬
- 2 調査対象 教職員(回答数 64, 昨年度は 67, 一昨年度は 63)
保護者(回答数 886, 昨年度は 862, 一昨年度は 716)
生徒(回答数 870, 昨年度は 920, 一昨年度は 981)

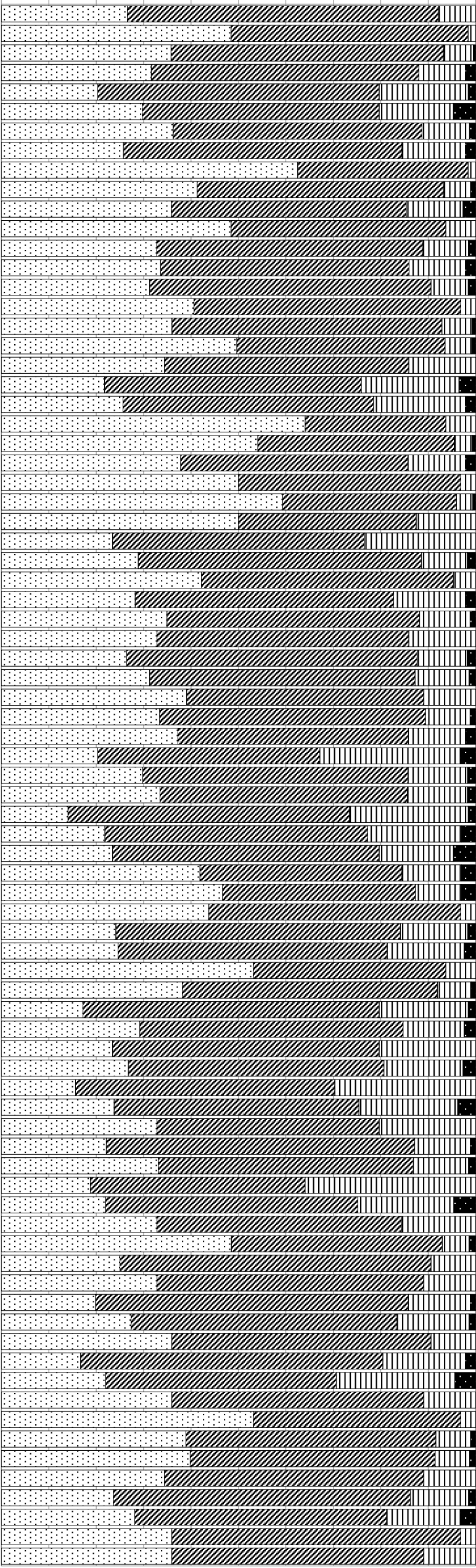
◎「個(別)No.」のTは教職員対象評価表を、同様にPは保護者、Sは生徒をそれぞれ対象にした評価表の設問番号を示す。
例:P5＝保護者用アンケートの設問No.5

◎令和4年度は調査Googleフォームで行った。保護者および生徒に対しても、標本調査ではなく、全員を対象としている。

学校評価表集計結果

よくあてはまる ややあてはまる あまりあてはまらない 全くあてはまらない

領域	共No.	個No.	評価内容
学校経営	1	T1	学校経営目標について、教職員間に共通理解がある。
		T2	学校の特色を明確にし、それを生かした教育活動が実践されている。
	2	P1	一宮高校には特色があり、それが教育活動に生かされている。
		S1	一宮高校は他校にない特色をもった学校である。
	3	T3	教育活動が計画的になされ、成果と課題が次年度以降に生かされている。
		T4	一宮高校で勤務することにより、自らの職務に対して充実感や満足感を持つことができている。
	4	P2	一宮高校で学ぶことにより、生徒は充実感や満足感を持って過ごしている。
		S2	一宮高校で学ぶことにより、充実感や満足感を持つことができている。
SSH事業	5	T5	SSH事業により、学校全体で特色ある教育課程の実践を行っている。
		P3	SSH事業により、学校全体で特色ある教育活動を行っている。
		S3	SSH事業により、学校全体で特色ある教育活動を行っている。
	6	T6	SSHに関する課題研究発表、大学との連携事業等や海外の高校との交流が効果的に行われている。
		P4	SSHに関する課題研究発表、大学との連携事業等や海外の高校との交流が充実している。
		S4	SSHに関する課題研究発表、大学との連携事業等や海外の高校との交流が充実している。
	7	T7	SSHの各プログラムの実施に向け、担当のプロジェクトチームのメンバーと協力して取り組んでいる。
学習指導	8	T7	基礎的・基本的な内容の教科指導が行われている。
		P5	基礎的・基本的な教科指導がなされている。
		S5	基礎的・基本的な教科指導がなされている。
	9	T8	必要に応じて個々の生徒に対応した教科指導がなされている。
		P6	必要に応じて個々の生徒に対応した教科指導がなされている。
		S6	必要に応じて個々の生徒に対応した教科指導がなされている。
	10	T9	Chromebook等のICT機器を活用した授業を行っている。
		P7	Chromebook等のICT機器を活用した授業が行われていることを知っている。
		S7	Chromebook等のICT機器を使うなど、授業に工夫がなされている。
	11	T10	学校全体で探究型授業の改善・工夫に取り組んでいる。
		S8	授業では、講義だけでなく話し合ったり発表したりする機会がある。
進路指導	12	T11	指導方法や使用教材及び評価の方法等について、教職員で相互に検討したり、研修したりする機会が持たれている。
	13	T12	生徒の志望の実現のために、長期的視野に立ち、周到に練られた計画のもとに指導がなされている。
		P8	学校の進路指導は、計画性・系統性が感じられ、適切に行われている。
	14	T13	進路決定に向けて、情報提供や面談などを通してきめ細かい指導を行っている。
		P9	進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。
		S9	進路決定に向けて情報提供や面談など、きめ細かい指導が行われている。
	15	T14	大学との連携事業や講演会などが実施され、生徒の進路実現に生かされている。
		P10	大学との連携事業や講演会など、生徒の進路実現に関する行事が充実している。
		S10	大学との連携事業や講演会など、進路実現に関する行事が充実している。
生徒指導	16	T15	学校行事は、生徒が達成感、充実感を持てるよう工夫・改善が行われている。
		P11	学校行事は、充実している。
		S11	学校行事は、充実している。
	17	T16	ホームルーム活動が生徒の人間的な成長のために実践されており、充実している。
		P12	生徒はクラスにおける活動が充実していると感じている。
		S12	クラスにおける活動は充実している。
	18	T17	生徒会活動や委員会活動は活発である。
		S13	生徒会活動や委員会活動は活発である。
	19	T18	部活動が活発になるよう支援している。
		P13	希望する部活動があり、活動は充実している。
		S14	希望する部活動があり、活動は充実している。
	20	T19	教育相談を円滑に行える環境を整え、外部機関と連携をとりながら、生徒・保護者が相談しやすい体制を整えている。
		P14	学校は、生徒が悩みを相談しやすいような環境や機会を設けている。
		S15	悩んだり困ったりしたことがあれば、相談しやすいような環境や機会が設けられている。
豊かな心の教育	21	T20	図書館は書籍・資料が充実しており、読書を通じて生徒の豊かな心や知的好奇心を育てる場になっている。
		S16	図書館では、自分の興味・関心に応じた書籍を選ぶことができ、知的好奇心を育てることができる。
	22	T21	生徒が、命の大切さや社会のルール・マナーなどの道徳を理解し、実践できるような指導がなされている。
		S17	学校では、いろいろな場面で命の大切さや社会のルール・マナーなどについて、学ぶ機会がある。
	23	T22	人権意識を高め、民主的な社会を実現する意欲を持った生徒の育成に努めている。
		S18	人権意識を高めたり、人権問題について正しく学ぶ機会がある。
	24	T23	主権者教育、消費者教育に取り組んでいる。
国際理解、社会貢献		S19	学校では、選挙や政治への関心を高めたり、社会問題について学ぶ機会がある。
		T24	学校では、国際理解や環境問題・社会貢献などに関する活動が充実している。
	25	P15	学校では、国際理解や環境問題・社会貢献などに関する活動の機会が充実している。
		S20	学校では、国際理解や環境問題・社会貢献などに関する活動が充実している。
	26	T25	教育活動において、ごみの分別や減量など、環境保全について指導している。
		S21	ごみの分別や減量などの環境保全について、学校生活で意識できている。
	27	T26	清掃指導を適切に行うなど、校内美化の意識を高める指導をしている。
健康・安全・施設・設備		S22	清掃時間にはしっかりと清掃を行い、校内美化に努めている。
		T27	機会を捉えて、健康の増進と安全の保持について指導している。
	29	T28	生徒指導上の問題が発生した時や台風・火災・地震などの災害時における、連絡体制及び指導方針が明確である。
		P16	学校では、健康で安全な生活を送るために必要な事柄や、防災について学ぶ機会がある。
		S23	学校では、健康で安全な生活を送るために必要な事柄や、防災について学ぶ機会があり、意識が高まった。
	30	T29	学校の施設・設備を定期・不定期の安全点検で確認し、適切に整備されている。
		P17	学校の施設・設備は、適切に整備されている。
開かれた学校づくり		S24	学校の施設・設備は、適切に整備されている。
		T30	学校の教育目標や教育課程を保護者・生徒に対して分かりやすく示している。
	32	T31	授業公開やホームページ、楽メ、連絡文書等を通して、校内の様子や情報がよくわかるように、地域や家庭への情報発信を積極的に行っている。
		P18	授業公開やホームページ、楽メ、連絡文書等を通して、学校の様子や必要な情報を受け取ることができる。
	33	S25	本校のホームページや楽メ、連絡文書等を通して、学校の様子や必要な情報を受け取ることができる。
		T32	PTAなど、保護者と学校が連携を密にし、協力して生徒を育てる体制を取っている。
校生活・内性・人材育成・組織づくり		P19	PTAなど、保護者と教職員が連携を密にし、協力して生徒を育てている。
		T33	校務分掌上で教職員間の協力と連携の協働体制が取れている。
	35	T34	公文書の授受・保管や、金銭・物品の管理が適正になされている。
		T35	教職員の資質向上を目指した研修の機会が持たれている。

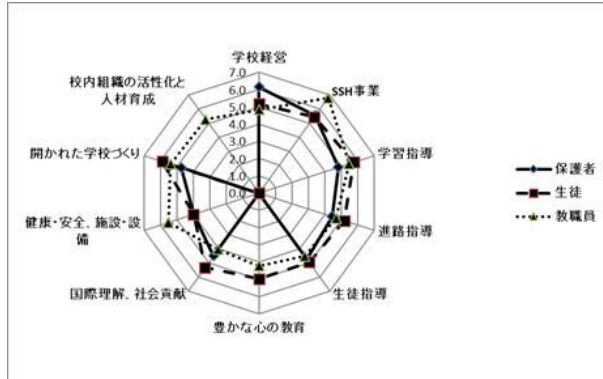


【令和４年度学校評価アンケート総括】

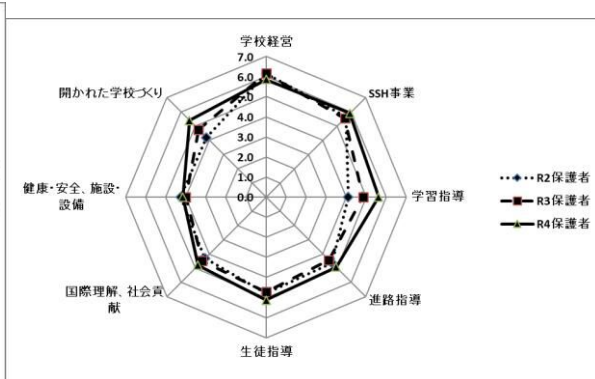
回答数	教職員	64	(昨年度	67、一昨年度	63)
	保護者	886	(昨年度	862、一昨年度	716)
	生徒	870	(昨年度	920、一昨年度	981)

一昨年度より 40 ずつ定員減

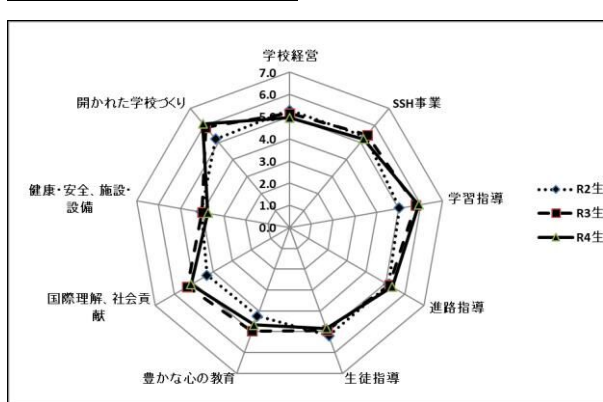
令和４年度学校評価



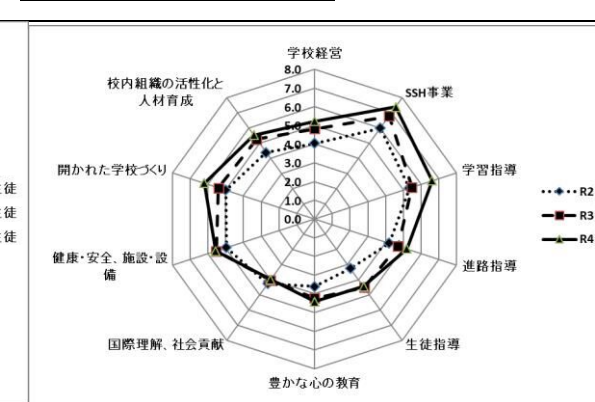
令和４年度学校評価[保護者]



令和４年度学校評価[生徒]



令和４年度学校評価[教職員]



【学校評価アンケート総括】

昨年度の結果との比較と、単年度の評価をまとめています。

- Web 入力を導入した一昨年、保護者の回答率が著しく低くなったが、昨年度楽メで複数回にわたって回答を促した結果、例年程度の数値に回復した。本年度は、昨年度以上に頻繁に楽メで呼びかけた結果高い回答率が得られた。

R1 : 928 (86.3%) ⇒ R2 : 716 (69.6%) ⇒ R3 : 862 (86.9%) ⇒ R4 : 886 (94.3%)

- 改善指数（評価指数の昨年度との差）の平均は、教員が+0.38（昨年度+0.59）、生徒が-0.10（昨年度+0.33）、保護者が+0.39（昨年度+0.10）となり、教員、保護者は改善指数が向上したが、生徒はわずかながら下降した。

- 「学校経営」に関しては、全般的に評価が高い。T3の「成果と課題が次年度以降に生かされる」は、「学校運営」の項目では低いポイントで推移していたが一昨年、昨年度は大きく向上し、今年度さらに向上した。

H27 : 0.7 ⇒ H28 : 2.1 ⇒ H29 : 1.8 ⇒ H30 : 2.3 ⇒ R1 : 0.9 ⇒ R2 : 2.8 ⇒ R3 : 3.5 ⇒ R4 : 3.9

- 「SSH 事業」の評価は、例年高い評価であったが、今年度も高く特に教員の改善指数が昨年に引き続き上昇した。昨年度より学校全体で SSH 事業に取り組む体勢が始まり、今年度はプロジェクト別会議を行うことでより意識が高まった。

- 「学習指導」の評価は、共通項目 No.9 の「個々に応じた教科指導」のポイントが低い（特に、保護者、生徒）。共通項目 No.10 の「ICT 活用」は、教員、保護者、生徒とも改善指数が向上している。特に生徒、保護者の改善指数は大きく上昇した。

- 「進路指導」の評価は、ポイントは高い。大学との連携、講演会の項目で生徒、保護者が下降していたが、本年度は改善の傾向が見られた。保護者 : R1 : 5.5 ⇒ R2 : 4.6 ⇒ R3 : 4.0 ⇒ R4 : 5.0 生徒 : R1 : 5.3 ⇒ R2 : 5.1 ⇒ R3 : 4.8 ⇒ R4 : 5.2

- 「生徒指導」の評価は、共通項目 No.18,19 の「生徒会委員会活動」「部活動」の下降がみられる。

- 「豊かな心の教育」は、すべての項目で生徒のポイントが下降した。

- 「国際理解・社会貢献」では、共通項目 No.25「環境保全」が低い、生徒教職員ともの改善指数は若干向上している。

- 「健康・安全・施設・設備」では、「施設・設備」で生徒、保護者のポイントが昨年度に引き続き下がった。校舎の老朽化が進んでいるが、県による大規模改修工事が控えているので手が出しづらい。今年度は、エアコンの新調、HR 照明の LED 化を行った。

- 「開かれた学校づくり」では、すべての項目でポイントが上昇した。「PTA 活動」の保護者の評価が向上している。クリーン作戦、一宮タオルの制作など新しい取り組みを楽メ等で発信していることで、保護者に周知ができていると思われる。

- 「校内組織の活性化と人材育成」は、T34「校務分掌上で教職員間の協力と連携の協働体制が取れている」は 4.4 で昨年に引き続きポイントが向上した。R1 : 1.4 ⇒ R2 : 1.7 ⇒ R3 : 3.8 ⇒ R4 : 4.4